

繪本
増補玉藻前 晴萩

潤岡 橋平
作 者 浅田 一鳥

安田 蛙桂

第壹天竺沙牟呂山の段

清るハ登て天と成濁るハ下りて土と成其開闢ハ日の本や唐土天竺か
ハリなき靈氣ハコリて人と成陰氣かたまる惡獸有八百億五万三千七
百六十餘歳を經し金毛九尾の老狐よて天竺唐土日本より渡り人民を
あやませし其往古ハ南閻浮提、南天竺の天羅國、班足大王より屬しぬる淨
波瑠國と聞へしハ普明長者が領地よて國も豊く富榮多羅葉菩提樹赤
栴檀木より生茂る沙牟呂山麓より住る農夫有馬忠子といふ正直者不慮の
事みて妻を失ひ筐の品を携て山路深くも迷ひ入此女房何所より居

る事じや、たゞへ人間であいとて、今一度あふてとつくりと暇乞一禮
もいひたし、此國の殿様おおきなさまの慈悲深ふて殺生せつしやうするが法度ほうどあれど、此山
中が鳥獸とりじゆの集る所、爰あひ居よかと尋て來たが、そふぞ逢たいくとよ
まよひ行ゆも心の闇雲あいぐもをわけてぞたどり行ゆ乾かわらの方ほう供人引つれ、當國亭
那臺なだいの城主じやうし普明長者ぼみやうしゃ玄づくと出來れべ、馬忠子まちゆうしかたへよひざまづき
憚おののりあがら殿様と見受みうけお願ひの一通、お聞届うつけ下さるべしと、恐れ入て
ぞ願ひける、長者おとなとつくと打ち詠うたがはめ、願ひの筋すじと有からり、様子ようしょよつて
聞届うつけて得うなづすべし、子細こざいナセと有ければ、是これへく有がたい殿様のおおきなさま
仰あお私わたくめハ沙牟呂さむろの山陰さんいん、住すまする馬忠子まちゆうしと、貧ひしい土民どみん米こめハ八汐はちせき
一ぱい買薪かいなきの伽羅きやらや眞那盤まなばんも朝夕煙あさゆきを立兼たてて、一人の母者おやし人も養やひ兼
ましたが、有時交地かうぢの兜論とろんが嶽だけの麓はづきを通とおつた時、思おもひも寄よぬ鶴つる一羽空そらか
ら落おちましたを、どらへて見れば失うしなが一筋立て有あてつきり獵人かりにんが射いそん

じた物で有と矢を抜てやりましたたら嬉しうふと飛去ました、内へ歸つて其翌日、一人の女が女房としてくれいといふて参つて、母の介抱怠りあく貧乏な世帯を見兼てやまとるゝ、鶴袋と言絹を織て進せふ、是をお上へさし上たら、千兩の金ある物と、せまい内に一間を乞つらい、必爰を見や乞うるあと、一人這入て機を織、ちよつぎりこつきり其音の面白さ、有時私がせんな物乞うと見よふと、透間から覗ひて見たら、其女房が鶴と變じ羽をふるへば雪どちる其毛を集めて絹も織、是はふし義と一間の襖明れば忽雌鶴の雲井遙と飛去し、跡も残つた此鶴袋、是を筐と取持て女が行衛を尋まする、もしや御用立あらばお求なされ事よど感じ、入てぞおひします、折から山谷震動して吹来る魔風砂石を飛し稍吹折音すさまじく、あいやと見やる其中、件の絹を吹上て虚空

よこそひ飛びちつたり、馬忠子見るより南無三寶、妻が筐の大事の織物
いづく迄もといつさんと雲を、目當と追かけ行く、長者もふしんの眉を
ひそめ、心得がたき今、魔風子細ぞあらん見届ん者とも來れと引連て、
かしこへこそ「志たひ行

同麓の段

沙牟呂山の山蔭の草ぼうくと生茂りいと物凄きあれ野ばらまた一
亥きり吹風よつれてかゝやく陰火の光りきらめき渡る其中よ顯られ
出る其形二八斗の女の姿錦繡を身よまとひ、上ようけたる鶴の毛衣、玉
を欺く粧ひ、和國の櫻海棠の、眠れる如き有様みて、我天地開闢より此土
よ生を受たる狐魔界よなさんとおもふ所よ、南天竺摩迦多國淨梵大王
が一子悉多太子檀特山よて佛法を執行し、三國よ是を弘め、我魔道をよ
またげあす、然るよ今此饅蓑手よ入上り、是を着して國王の姫と爲り、班

足王が夫人と成かれよすゝめて佛法を破却させ、魔界となさんへ案の内、あら面白や嬉しやと、笑をふくみし眼尻まなじり、誠まことに、傾城傾國の嬪娟せんけんたる紺よそほひよ、玄づく歩あるむ後うしろの方、覗うながひ聞たる普明長者、腰こしよ帶たせし獅子王わの、劍を拔はずば震動しんどうし、美女の容うめい忽うつ々書消けす、如く失うけり、普明ふめいいあたりをきつと見て、安からざりし國家の大事、聞取きこたるもの劍の威德いとまき、魔道だをやぶるも我方寸さわと鞠くじらみ、納なめし胸むねの内、曇くもらぬ鏡淨かゞみじやうはりのていや、臺だいへと行空ゆうくうや

蘭亭宮の段

般若波羅密普門品陀羅尼真言、稱名の法の聲こゑぞ喧かきびし南天竺なまつの天羅國班足王が都の構くわへ、蘭亭耶らんていやの樓たかど、寄つせひたる官女共うぶ、ナント林りん如呂婦りょふ、此天竺あたゞかの暖ぬるで秋冬玄くわらぬお庭おとの詠かため、伽羅きらたがやさんやさんの花盛さかり、蛇我垂八沙の實みも出來でる、見事みじやあ事じやあいかいのの、あんたら女のいやる通り、ふ花畠ばたけの牡丹蓮花ばたんれんげ、まん玄くわゆ玄くわやけ迄花さきが咲さき、麒麟閣りんかくや娑角天山しゃくかくてんざん、又鳳凰孔雀ほうおうくじやく、

迦陵頻が嘵る聲を聞時へ外へ出たい氣はしない、それより又大王様
花陽夫人様といふお后がお出なされて、皇后の采姫夫人様へおいとし
いじやあいかいの、花陽様の御殿へ這入誥て、數多の天人を集め、舞子
よして鑼もやう鉢で大騒ぎ、御酒宴の肴も人魚のさし身蛇の鮮じや
の猩のかペ焼でも、何でもあたが望次第結構な身じや有まいかされ
ばいのそふしてあの花陽様へうつくしい顔も似合ぬ、弓射る事が大お
上手、それ故大王様と連立て毎日くの野山獵、殺生するがお好といふ
れ、これつたくせが有物じや、それより引かへ采姫様、お慈悲深ふて信心
者、大王様へ願ふて千人の坊様達を呼で、佛事供養有がたそふな事で有
たよ、花陽様のお差圖で、こちらが様なうつくし者をけんたんの様も身
じまひさせ酒や肴を運して、色で仕かけて墮落させ、それを科よ坊様達、
獅子の餌食喰したり、いちらしひじやないかいのう、そりやそふ思やる筈

の事、わがみも其時坊様^{ぼうよ}、喰^くじたのじや有ふがの、何のまあそんあ事、志
たが日本で^ハ坊様の女房^{めいぼう}と成^なと大黒^{だいこく}といふげなが、天竺^{てんしゆ}で^ハ何といふ
ぞいの、さればそあたの顔付^ほ、ほ^うのふくれたぬた福神^{ぶくじん}、辨才天共^{とも}いをか
いのふと、せつと笑ふ^{わら}ひ異國^{いきこく}でも、糠^{ぬか}の崩る^{くず}、病なし實諺^{げしことはさ}よ人事^{じに}の、もれ
てかしこに、聞へけん^き錦^{にしき}の帳^{とばり}を玄^{くろ}ぼらせて奥^{おく}の殿^{との}采姫夫人^{さいひ}、羅綾^{られい}の袂^{たまご}
かき合せ志^しとやか^は出給^ひ^けウ女子^{じょし}共^{とも}あれ^はて聞^きばはしたあい花陽夫
人の鳴^{うな}我君^{わたくし}のふ耳^{みみ}入^{はい}べ、自^{おの}がい^はすかと、おさげしみも耻^{はず}かしい、必渉
沃^{むす}を仕^{つか}やん^なや、そあた衆^{しゆ}も知通^{しゆう}り花陽夫人^{はなよ}のさかしら言^{こと}、佛道^{ぶつじゆ}を信^{しん}
る輩^{たぐひ}、悉^{すべ}多太子^{たけし}と一味^{いつめい}して、謀叛^{ぼんばん}と云立^{いふたて}百ヶ國^{ひゃくかくに}の王達^{おうだつ}を悉^{すべ}く擒^{とら}とあし
一^つ所^よも押^お込^こて^ハあの如^く同音^{きょうおん}、^ハ經讀^{きょうじゆ}誦唱^{しよちよう}名^{めい}の聲^{こゑ}を聞^きみも^ハ怒^{いか}
近^いい内^{うち}より首^{くび}を討^う、花陽夫人^{はなよ}を慰^{なぐ}めんと、無理^{むり}非道^{ひどう}ある^ハ仕置^し、^いかなる
天魔^{てんま}の見入^ぞや、淺^{あさ}ましの^ハ心^{こころ}と世^{よの}を恨^{うら}たる^ハ歎^な、お道理様^{りよよ}やと、林^{りん}如^す呂

婦、案陀羅たらと俱涙飯經脚布の袖袂すしり上るぞ殊勝あり、折からば
門さしめきて、樂を奏する管弦の音、あれ我君の早還御皆出迎やとのた
まへばはつといらへて官女達階近く立出て還御今やと恐れ入待間程
なく庭上よ、大王の威を輝し、瓊瑤かけし絹笠を官人よさしけさせ、印
子の天冠蛇形のほ衣跡よ引出す大象の脊の屋形を輿車、花陽夫人を乘
奉り、警固の穩風逼比留大臣都阿鼻の侍、車加多羅梵、其外官人隨へて、
獵の場所も還ほ有常の御座も入給へば采姫夫人の志とやかみ、今日い
れ早いに還ほざぞお勞どめた給へば、大王機嫌うるゝしく、何の／＼花
陽夫人を慰めんと毎日／＼遊參山獵、此程ハ彼普明長者が領分きやつ
ハ慈悲心深く殺生を禁ずる故、禽獸多く集ると聞、淨破璃國を獵せし、所
思ひの外よ大きあ得物、麒麟唐獅子一角、鳳凰孔雀陀鳥、あんと櫟木の
鳥獸、花陽夫人が懸香の料とて麝香猫を狩出せしよりつかり、犠牲の贋

物斗、いらぬ殺生した事じや、又明日から流砂川の川狩み鯉鮒鱸鱈なん
と氣をかへて樂しまんと聞もうるさき采姫夫人、大王の傍みすみ寄、
も恐れ有あがら此天竺ハ佛の國、佛法を立て政を納め無常を玄めす國
の風、君も信心有けるがいつの比も花陽殿さちよりすしめられ、佛を嫌ひ殺生
を好み、罪あき者を害し給ふ其恨の積りあべ終より此國亡び失來世ハ
必無間地獄ぢごくより落給はん、御心を入かへ花陽殿さちを退けて、身を全ふあし
給へど、涙と俱よかきくどき、夫を思ひ世を思ふ、貞女の道ハ唐倭、天竺迦
もかららざる、操の程こそ有がたき、後興の内も花陽夫人、采姫さむきが諒いさぎをと
つくと聞、官人よ助られ、志づくおり立傍近く、面おもてよ怒りの色を顯あらわし
最寄よりあれよて聞べ、事おかしき後のふ詞ことば、そふおつしやる佛法程、國
よ害有物あわざり、ア釋迦しゃかといふハ摩迦多國、淨梵王じやうほんのうの一子よて、佛法執行しゆぎやう
と偽り、靈鷲山りゆうじゆさんよかたらひ謀叛ぼはんを工たくむ謀ぼう、そりやそなたのさかしら言こと

勿体あくも釋尊の王位を捨、妻子を捨、寶をなげうつ生佛、それをさみするそあたり外道、やうもじこそ謀叛の荷膽人、そなたが、そもじがと互よつのめ争ひよ、大王大きに怒らせ給ひ、につくき采姫が諫言立引立よと倫言よ、大臣官女押濟双方あだむる折しも有、普明長者案内と呼れる聲よ班足大王、それ待かねし普明長者必ぬかるな者共と下知よ隨ひ官人共、參内今やと待もふけ心ぞくばりひかへ居る、程あく階下より來る、亭那臺の城主普明長者、仁義を守る正直の頭よいいたゞく輪巾よ、衣服の花美の好まねど、自然と顯れす優美の骨柄、大王眼下よ見下し給ひいかよ普明汝我屬國を領しながら、悉多太子よ心を合せ、此天羅國を傾けんと謀る、班足とくより悟り知政事を談ずると偽り招き寄し、事の實否を糺さん爲返答有やと、居尺高、普明ちつ共恐れず、思ひがけなきは詞、我國數代君よ屬し、いかでか謀叛なすべきや、身此程も花

陽を宮中又招き入、后方へ打捨かれが詞又付、百ヶ國の王を擒となし佛道を忌嫌ひ、千人の僧をとらへ柵の内又追込、獅子をもつて噉殺させ、罪あき者を斬害し、鳥獸又及ぶ迄命を斷事を好給ふ、某とくろ見聞しゆへ、一命をなげ打てば諫言をなさん爲、恐れず參内致したり、かゝる惡行を重ね佛國の王といひんや、何とぞ心を本心又かへし給へれ、あを乞願へくら花陽を退、殺生を捨慈悲を心得國家を治め、太平の基となり給ふべしと涙を流し諫ける、采姫夫人も力を得て、今之長者の諫言を道理と思し召あらば、心を和らげて佛を信じ給へれと、君を思ひの貞節又花陽の怒りの顔色からり、后といひ普明が詞、兩人互に心を合、君を佛道又落し入國を奪ひん謀、必油斷仕給ふなと、飽迄すむる佞肝邪智、これら普明々つとせき上、又つくづき嬌婦が其一言、だまれやつとねめ付る、威有て猛き眼の光り、大將憤怒の相をあらはし、だまれ長者、朕同然の

花陽はなよと雜言重きわどいねく 虧外りよがいの汝おの我目通りがのめどりの相叶あわせののヤアく者もの共とも彼かれを獄屋ごくやへ引立ひきだてよ早くはやくと下知しらしすれべばつとこたへて官人かんじん共とも鉢先揃はちさきそろへ立出たてでて、普明立ふみだてやれと罵ののしれべ、かんらからと打笑うちわひア 小ざかしき下官原しもくわら君きみ諫言かんげん仕抜しおり迄まで此御殿ごてんの動うごかぬ某もの手向てむかひあらば手ての見せぬ獄星ごくせい环わなとの事ことおかしい案内あんないせよと先まへ立たて恐おのれぬ勇いのとまどまどの智者ちしゃ取とかこまれて入いみけり、大王重おほきみねてこりや采姬さいき朕わたくしが數年いくねんの恩義おんぎを忘れ、普明長者ふみながしゃと心こころを合あせ、此一城かたを傾かたむけんと諫はがゆし段きわ奇怪きわい至極しづく、其罪科そのざいより兼かねて聞及きくぶ、花陽はなよが手て並ながの弓矢ゆうしをもつて汝おのが兩眼耳口りょうがんじゆくを的まととして射藝じげいの程ていを試ためんと、惡逆おのき不道ふどうの偏言へんごんを、采姬夫人さいきふじんの恨うらしげよよ、曲まがも亦また我君わたくしの仰あおさらアく 憎氣のんき妬うらみよあらず、忠臣じゆしんの諫じやんを用もちひず、非義非道ひぎひどうの思おもし召めしめし、人の恨うらの積づまあバ御身ごじんの大事おほことと成なせん情じようのの心こころと、其身かれかしまぬ夫思ふしひ、ことわりせめてあられなり、班足はんそくいかりの大音上ナフ詞ことをかへすよつくさ女レバ、逼比留ひつびるき

やつを奥庭へ引立、樹木のまとよつなぎ置、はつと斗み逼比留大臣いた
りしあがら引立し、地獄と繪書牛頭馬頭の、呵責もかくやと乞られけ
る、かしる折しも城外と勝鬨あぐる金鼓の音、大將あいやと見給ふ所と
蛇形の大旗數多の鉢先討取首をつらぬきく、追々かけ入諸軍勢、まつ
さきよ於彌加羅品、主君の前よつと玄んで、されば此度仰を請、摩迦多國
よ向ひし所、釋迦よ一味の五百羅漢、其外數万の佛者共、百里四面の釋迦
堂よ立こもり軒よ三筋の通り町八日市まで砦をかまへ、事嚴重よ見へ
たれべ、力せめよ叶ひじと彼天笠の横町から、ふ意を打てせめ入バ茶
良六昆逼得權、鉢をふつて切て出爰をせんと戦しが、甘余王が首討取
只今凱陣仕ると息つきあへず、訴ふれば、大將大きよ喜悅有て、適く
汝がはたらき、恩賞沙汰の追ての事、此上に檜とあし置たる百王共が首
をはねさせ、花陽が心あぐさめん、夫人來れと手を引て別殿、さして入た

まへべ、諸軍もれのくいさみ立ち、凱歌をおさめしづくと陣所へこそは別れ入、蘭亭宮の南面より樹木しげれる築山の下にぼたんの花ざかり、しほむ姿の采姫女、きのふまでに金殿の臺の上よかしづかれ、今へ素足と白砂も無實の罪と身を沈め、見る目いぶせきしばり繩官人共と引立られしづく、として出給ふ、情用捨もあらけあく庭木のもとよからめ置、我君の仰花陽様のお差圖なれば是非があい、笑止な事といひ捨て、かしこにこそりあゆみゆく、跡よ采姫へつながれし、繩目のかづら打玄ほれ、最期を待間のはかある。今ぞ此世の名残ぞと、口よ念佛をとあへしれあへれ、なりける次第あり、靈明殿の樓より班足王を慰よ樂を奏する笛の音や、琵琶の玄らべのふもしろき、喜怒愛樂のさまト、爰ぞ生死のさかいどて、百王達ハ獄屋の内來世を願ふ經文をとあふる聲のかまびすし、こなたもやうく涙をはらひ、樓より音樂の最中笛太

鼓の聞納め、アほんよ思へべ此身程、因果あ者が世よ有か、社達王の娘と
うまれ、天羅國の后きみとあり、月の遊まよひや花の宴君と諸共よろちたのしみて、夜の
ふすまのむつごとく水も洩もろさぬゑよしをべ、月よむらくも花よ風いつ
しらかへる一人寐ねよ、こがるゝ胸むねもおしおづめねたみ心こころのあきものを
年月あじみし我君が妾わらわが命いのちを斷きりよどひ、あんまりむごい胴欲どうよくな、聞へま
せぬとうらみわび、身みをもだゆれば、ちる花の、空よゑられぬ雲見くも、む
らさめゑきる血ちのあみだきへ入ばかりよ泣なきづむ、早刑罰けいばつの刻限ときと富
人ともの用意よぎをあら、鋒短鉄ほこたんてつをぬきもつて、庭上ていじょうよ居ゐならべ、大王だいおう
よ花陽夫人わかな弓ゆみと矢やたづさへ立たつて、いやのふ采姬さいきとのほ身みつねくみづ
づからをよくみたる、うちみの一矢思しひ知しりや、イヤ其方そのがたをゑりぞけよと
いふたる口咽ののの穴あなから射いたてゑまへ、にくうれよりの佛の道み、聞き込こだ耳みみ、
穴あないづれが先いよ射通いたさんと、あざける詞ことよ顔ほを上あ、どうよくあ事ことばか

ありん氣妬ねたみの有ならひ、あられもない姫ひめごぜの弓矢の道の心見まことよ、的まとよ
せんどの何事ぞ、うらめしい心やと歎く涙なみだよ下官共しもくわんぐわく、いいたりしやと斗
よて、俱に心を玄くつほれける、花陽はなよの妬恨ねたみうらみの一矢ひとやねらひすませし向ふより
さつと吹來る風かぜよつれ、其だけ丈余じやくよの大の獅子じし、真一文字まんいつじまよ飛來る、遼さうの
花陽はなよも恐れをあしは殿だいをさして、遡入のがれバ官人共くわんじんぐわくの只うろく、獅子じしの采
姫ひめのいましめ噛切かみぎれ、よひごしどふと引くへ、林はやぶさの中なかよかけ入りたり、大王
大きよ怒いかりをあし、合点あての行ゆきぬあの獅子じし、いづくより入たるそ、さく者
共ともアレ生取いきはつとこたへて下官共しもくわんぐわくめいいく、鉢はち鉢はち太鼓おほ上うえを下おちへと「騒さわぎ
けり、夫人ふじんを助け廣庭ひろばきいつさんよ走りきて、谷たによかけたる石橋いはしの牛うしよ
立たる件くだんの獅子じし、文珠淨土もんじゅじょうどの石橋いはしも斯かやと斗たたかいまし、官人くわんじん皆みな鉢手鑓はちて
棒ぼう割竹ざくしよて追廻おとまわせべ、飛付とけつけく、噛切かみぎれあつと叫びさけてたをれ伏ふ、深手ふかを負
て逃のがるも有算みだりを乱せし有様ありようあり、班足ばんしゆ大王だいおう飛とで出で、さく小さかしき畜生ちくせいめ、

手捕つかみせんと追廻る、花陽夫人はなよの樓より王の働き獅子しのふるまい、目めば
なしもせず見物す、大王だいおうの大手おほてをひろげ、むんすと組めばふりはあら、む
かふてくるを左右さゆうよからし、難なく足下あしあよ踏付れば、あやしや震動しんどう稻光いなひかり
り、獅子しのかたちへきへ失て、釣つると變じかたへある樹木じゆぼくの枝えだよとまり
ける、始終しぢゅうの様子ようすを花陽夫人はなよ、窺うかがひ見たるこあたゞこあたゞ我君驚き給ふな其
子細しきや上あんと采姬后さいきごを伴ともなひて、玄づく出いる普明長者ふみや、今いまの獅子しこそ某それが
が家いえよ傳つたれる獅子王しと名な釣寶つるたからの徳とくよつて、アレ姪いんよ婦ふが正軀ただみを、只今
顯あらわしに覽らんみ入いんと、釣つるを取とて拔放ばつぱうせば、あつと一聲大きよ叫さけび丹花たんばの
唇耳くちびる迄とさけ、九くつの尾おを振立ふりたてし、狐きつねのかたち忽たまちよ東ひがしの空そらへ飛去とがたり、アレ見
給ひしるは大將だいしよいつぞや我本國ほんくによて出合しゆあしやしのもの、正しくかれ
と我黒星くろほし后ごと變かわせし姪いんよ婦ふは亡失ぼうしつたり、我君百王方さんわを助け佛ぶつを信じ給ふ
かと、忠義ちゆうぎの詞ことよ班足はんぞく王おう、ア誤あやまつたりく、暎天羅國えいてんらくにの主ぬしながら、老狐らうけと玄

らすきやつが心よ惑ひされ、其方が忠義采姫が貞節諫の詞を用ひずして、百王を害せんとせしわが誤り、剩へ罪あき千人の僧侶迄、悪獸の爲み失ひし佛の御罰請んぬ恐れ。今より釋尊のむしへを受、佛の道入べしと、惡よつよきハ善道よかしこき智惠の文珠の導さどり給ひし大將、實一城の御あるじ、普明長者もいさみをあしま、あつばれく、君釋門に入たまひ、臣本國立歸り、南天竺を守護なさん后の宮中立給へとすめる詞、采姫の方、君よ名残りぬおしどりの狩、よどらるゝわらひが命ふしきの奇瑞、よ助かりしも、これ皆御劍の御徳とよろこぶも又わかれのなみだ、せめて玄ペシと引とむるを、其手をはらつて御大將、鷲のお山と淨はりへわかれ別るゝ法の道、衆生をてらす月の國代よみ、さかへぞ有がたき

夢よだよ見ぬ唐土の末廣く千里の原も廣よと、錦織なす道野邊の草踏ふ
分て數多の官人、綺羅を鎊しひに輦恩州の津よさしかられべ、警固の役人
下部よ向ひ、此度主人冀國公、紂王の仰よよつて姫君姐己を入内の道筋、
此行先へ董貞郡、暫く是みて休息せよと。指圖よ隨ひ車をどゝめ、暫し
息をつき居たる、時しも一天かき雲り、車軸を流すはやち風、空よ稻妻は
たゝがみ、恐れおのしく雜人原、狼狽騒ぐ其隙よ、いづくらかゝ年經る野
千眞一文字よかけ來り、車の内へ入よと見へし、あつと叫ぶハ女の聲、妖
魔の見入ぞ恐ろしき、警固ハ何の氣も付ず、下部を制してヨリヤ者共、太切ある姫君よ過ち有てハ言譯あし、早旅宿へも程近ければ、急げくの下知
え連々轟かす小車の音も深山よ御して、樹木をあらず追風や道を早め

て

大公望漁の段

玉藻前

十九

曲る世よ曲らぬ針も己が儘心も清き水上へ蟠溪谷の岸口より容貌活面
異相の老人石上より座を玄めてうきふし込し釣竿も好める道の一釣竿餘
念へ更よ見へざりき濱風よ通ふ千鳥の聲あらで芦かき分て西伯文王
雷震一人引連て渭水の岸より立休らひく漁人物問ん此蟠溪の草爐の
中よ呂尚といへる人有べ教てたべと有けれ共只一心よ釣竿も悠々た
る頭をもたげ夫乾坤の大極より發つて宇宙を生む湯王廿八代の主殷
の紂王聰明獻智の明主ありしに姐己が色よ心亂れ忠臣義士を退失ひ
民百姓を斬害して國正よ亡びんとする我陰國の乱を辟只雲水よ心を
澄し世の塵埃を斷し身よハ忌りしき問答やとさも不興げよべもな
き雷震の聲あらしげヤ推參なる筆め此は方を誰とか思ふ忝も西伯迎
西國の奥大名心よ望有べこそ馬車も召れずして此海邊を吟ひ給ふ
よ土邊よすよつてかつつくばい三拜ハひろがいで出るまゝの難言過

言、雲雀骨をめつきくへし折て、くれんすと、勢ひかゝるをはつたとね
め付、ア尾籠びらうに雷震らいしん賢者けんしゃに向ふて不禮至極ふれいしきすさりおらふと呵り付、禮義
正しく文王ハ、漁人よに向ひ頭を下ア、誠や名玉なめだの光を覆おほふと天をたてよ
し地じを緯ねする才有て百万の強敵がうてきも掌たなみ取とひしゝ大公望だいこうわと見しひ
が目か、足下の今の一言よて明徳爰あら顯あられたり、我こそ岐州西伯きしゆなり
何卒貴君我國ま來り仁義五常じぎを垂給たれひ又一つよい四方の異敵ゐてきを退しりぞけ
國泰平たいへいの基もとと成數せいじゅを示しめし下さらば此上もしもひひす偏ひだと頼よりみ奉はると身
を謙ひそり詞ことを崇あがめ真砂まさごと額ひだいを摺付すりく君子きじをあづくる良將りょうじょうの、其功いはしを
類たぐいひなき様子さまを見聞みき血氣けつきの雷震らいしん思おもひず玄くろらず高笑たかわらひ、ハ、鷄けいを裂さきみ牛うし
の刀とを用もちゆるとやら死損しよそひの白髮しらは親仁じんじんと叮つぶ咤ね過すぎた御挨拶ごあいさつ最前から見
ておれ巴つる、釣針つりばを曲まげもせず餌ゑもさしすみ魚うおを釣つるどり、此廣ひろい唐土とうども今
一人ひととない大おほたけれど嘲あざる詞耳こともかけず、一心不亂いっしんふらんよこなたの漁人うおにん

慥々手ごたへ釣上つりあし、尺余しゃくよ餘る白魚しらうおの勢いきは、鞠くまれる雷震文王らいしんぶんじも奇意きぎの思ひをあし玉たまふ、漁人うじの白魚しらうおを兩手りょうしみさしげ、今若者わかわざが難せむづせしとく魚鼈ぎゆうの類たぐいひを釣つるみ有あす、只玉公たまこうを釣つるんとする、時成ときなりかあ今日只ただ今文王ぶんじ我わを招むかき玉たまふ、折おりしも釣得つりあし此白魚しらうお、我わを辱みぢびく天あまの賜たまごのア、有あがたしくと魚うおを海うみ獺あじらよ取納とりなめ、文王ぶんじの前まへよ謹つつしんで某もの不才ふさい成なといへ共天あまの助たすくる名君めいくんよ仕つかへ、草爐そうろを三度さんど願がほりる、大恩報おほのむくせぞぞ有あべからず、紂王しゆうおう猥みじなよ人ひとを損そそひ百姓塗炭とたんよ落おち入はいたり、今いま君くんと心こころを合あせ御代ごだい泰平たいへいよあさん事こと、我方寸わがまつの内うちよ有あ少しも氣遣き遣ひし玉たまふなど、詞ことばすましく老眼ろうがんの瞳ひとみも威有いわすて猛おのからず、般ひんの姐だうき已はるはを亡なせし、實周室じしゅしゆの大元師だいげんしと美名めいめいの代だい々だい芳かなしき、文王ぶんじ悦喜えつしきの面色おもていろよて、頼たのもし、足下あしあを得たるとくたる潜龍せんりゆうの淵ふちよ出でたる悦びえつびぞや、我領内わがりょうないへ程近ちかければ是ぜ直ただよ同道どうどうせんせん、雷震らいしん興車こうしゃの用意ようびせよ、早くと有あけれど、大公望暫ときしととせめ、某齒よほひ八十や余よりて、無益むえきの殺生せつしやう

何かせん、君の開運時至らべ再び奇瑞を顯へせよと、以前の白魚を海中
よ放せば、尾をふり、鱗をふり八重の沙路を游ぎ行こあたり主従水魚の
因勇有雷震仁ある西伯浪のひゞきや眞砂地を打連てこそ歸りける

紂王御殿の段

形山の鼠虫金器の内よ横行すれば、玉石俱よ亡ぶとかやいたむべし殷
の紂王、皇妃姐已が色香よ迷ひ、日夜よつのる觀樂へ、罪なき者を無成敗
士壇の持へ首溜り、壠かへす代ぞ是非もあき、手でよ鋤鍬下官共、一ヶ所
よ寄こぞり、丹ほつどふ思やる、ア姐已様がござつてから、王様のお心
がめつきりと荒く成歴のは家來衆、比干様や箕子様始めつたやたら
よぶち殺し、胴がらい魚の餌食よ成かして、蓮池の血の池、ザビイ、今も今迎
は門へ出りや、料理忘らるゝ百姓共が、何がいやが上よ重り合、彼泥龜屋
同前其下へは這入、其下へはくゞり、は門の内へ這入まいとするいぢら

じさほんよ目も當らるゝ事じやあいひいの、其泥龜突ナガハシタマツルといへば、
意地わるの飛仲間フジノマジ頬付なら根性あら、悉皆鬼じや、ござめつたあ事いふ
あ、あれくアソコへ出て來たぞ、鬼のこぬ間カヌマジ洗足スルタマツルせふ、ぶおんくビと
下官共、お次へこそり逃て入、折しも妻戸押明ウドハラヒタマツルて、高祿太夫飛仲官フジノマジ出頭ダラの
鼻高ハサクくビと、階の元ハシ歩み來る、檢非違使ケンヒタマツルシの官人罷り出ハラシタマツル、今日の罪人ミツジンハ
洛陽ラヨウの百姓共、早先達シテて使マジの廳テラへほづ込置ハリシタマツル、いかゞ斗ひタマツルひタマツルさんやシタマツルと窺タマツルへ
バハ成程ハシメく、見分ハシメの某が役目、早く是へ引立來れはつと官人ミツジンかしこよ
向ひタマツル、洛陽の百姓めらを、残らず是への聲ハシメみ連、切戸の外ハラタマツル役人ミツジンよ擲ハリシタマツル
き立られをいやし、泣ハラハラも詫ハガハガも聞ハシメバこそ、皆ハシメ庭マツル引すゆる、飛仲官フジノマジ玄カミ
りと見やり、百姓供ハシメよつく聞、今日ハ帝の御遊、御酒宴マジタマツルのハシメ肴ハシメよ御前マジタマツル
よおいて我達ハシメを一ハシメ成敗ハシメ、天子タニシのお慰ハシメみよ預ハシメる、冥加至極ハシメ有難ハシメいと悦ハシメ
びおらふと、聞て惄ハシメ震ハシメひ聲ハシメ、帝様ハシメでも天子様ハシメでも、人の命を澤ハシメ

山そらよ、酒の肴よ成敗とい、余りむごいお聴欲、お情お慈悲じや拜みますと、皆よ一度に手を合せ涙と俱よ、泣詫る飛仲官はつたとぬめ付ヤシぐくよも立ぬよまい言、いつ迄云てもモウ叶ひぬ、是非がないと諦めて、念佛の一通も唱へおらふ、シレ罪人めらを皆よくし上い先あの大端ハシスをる太り肉油ぎつて心地よい、そやつゝの聲より早く高手小手、次ハセ滑だる雲雀骨差圖ハシナみ取て羽がいじめ、そやつ焼鳥重疊テラヘタく、跡ハシナこいつと立かかる、ほ歎ハルされてと手を合す、物な云せそきんかん親父、驗氣ゲンキよい筆ハサクめ、さやつもくしれよ、荒玄アラカニ共、有無ハサウエを云せず三寸繩ミツセンワ、玄アラカニぱり上たる有様アラカニ、焰魔アラカニの廳テラで罪人の、呵責カシキよあふも斯やらん、飛仲官したり顔ハタマ、よいざまくヨリヤく者共、最早君の還ハシナ程も有まい、繩付めらを獄ヤクへ引はつとこたへて下官共情用捨ハサウエあらけなく、追立られて百姓共、是非なくとも大理寺の獄屋ヤクヤへころり入ハシナけり、早還ハシナぞと百官百司、黃羅イエローラの玉蓋タブカバさしかけ

させ、酒池の遊三千歳もさめぬ築花の花かづら物いふ花誘われ
登るに殷に花清宮設けの褥よ座し給へば、飛仲官頭を下某不才成といへ
共君の爲み心をゆだね、笑を献じ奉らんと、思ひ付たる、酒池肉林のけふ
の遊、帝を始皇妃とも麗しきに尊顔を拜し奉り、此上もいはずと、おも
ねる詞よ殷の糸王同、今よ始ぬ其方が計ひ、酒の愁ひの玉はきと汲共
盡ぬ衆の酒盛、肉の林よ舜諷きらうた、君が一節たまらぬく、と三千年よ一度
咲桃より希す美人草、命取めと引寄てもたれかゝりし鬼あざみ、恥らふ
姿、姫百合の姐己もよつこと打ゑみて、ふつゝかな自分が覺ぬ舞もお笑ひ
草、只いつ迄もお見捨あふ、必やいのと目の内よ通ひす心色ふくむ、顔よ
見とれて現の糸王、飛仲官圖よ乗て、是からりお后へ某が駆走さぢよ百姓
めらを一料理じやうりょう、官人共やい先達て捕へ置罪人めら、早く是へ連來れ
ど、云つゝおりる庭先へ、バットこたへて官人共、早引出す以前の繩付、土壇たんの

前より引すゆれば、紂王はくく打ほゝゑみヲ夫を肴よ一獻くまん君が
情の色有益いテで賞勧と大盃、心得宮女が長柄の銚子、つゞ間通しとぞつ
とほし肴ヲと有ければばつといらへてひらめく帶劔大げさム打放せ
べ、ハよい慰み是からハニ二つ胴、朕が手の内心見よと、紅ひの裾ヲ小短く
は階の元より給ひ繩付土壇ヲあも重ね玉ちるごとき寶劔を切柄は
めて飛仲官、恐れ入てさし出せば、よしと尖き眼中、振上給ふと見
へけるが、四ツム成て死テげり斯と聞より司徒梅伯恐れ並居る官人共
押分ク紂王の傍近くさし寄て、どつかと座して涙をうかべ、情あや
我君皇妃姐已が色ム迷ひ、姫酒ヲの二ツム身を忘れ雖アキ士民をハシ
討トヒシエ、曲カもあきハシ赤心終ム國家の滅亡ム、成もやせんと歎ハシしく
千度、百度諫シれ共、一ツムも許容ハシあらばこそ、日ハシ々ム慕ハシれる惡逆非道先祖
の社ハシよく宗廟ハシ怒ハシりいか斗ハシり心ハシをひるがへしとくハシ本心ム

成給へ改め給へと憚りなく、齒も衣着せぬ忠義の諫言、金言耳も逆立紂王、ア尾籠ア梅伯、諫めをいるしの臣下の役と云せて置バ法外の雜言、朕アを侮ルり寵愛の姐己アをさみする不届き者、うぬも一所ア所又釣の鉛、覺悟致せと振上給ふ、御手を姐己押シメめ、先アお侍下アさりませ、君恥シメを受る時アの臣正ア死するとやら、君をあざけり自ア又仇名アを付る不忠者、諸人アの見せしめア重アき苦痛アを見せ給へとすムめアは紂王打アうあづきア、汝が工夫の炮焰火、是究竟の責道具ア早アくアと有けれど下知ア傳アふる飛仲官鶴の一聲群鳥アむらがる、雜人奥庭より、手で又引綱車臺、廻る尺余の銅筒ア中アよもへ立焰アの丸がせ、炎アくアとしてほどばしり、さもすさまじき刑科の備へ姐己諸臣ア打向アひ、此刑具アの自アが君をさとせし火刑アの一アつ、衣服をぬがせ此丸がせを抱アく時ア、いかなる強勢勇猛の者成共、火毒アよ苦しみ立所に命を失ふ、是を名付て炮焰アの刑アといふ、ヨリヤ梅伯、汝三寸の

舌を以て命を果す其身の不覺と云せも立すはつたとねめ付ヤア傾國の
色をもつて君を惑まきひし忠臣を殺害させ國家を亂す極悪人うぬが體を
八つ裂さざなよど、ほ殿を目かけ飛かしる向ふへすつくと飛仲官、あまたの官
人追取込冠裝束引玄やなぐりくるくくと丸はだか押立く火炮は
の傍寄ぞと見へしが苦しみ叫さけび虚空を摑つかみ死したる身の毛もよだ
つ斗あり、糸王スミノミコトの笑坪ハナツモ入アリ心地よきくたばりざま寵愛の姐己ねたまを妬み
朕ちんが心よ逆さからふやつばら片カタつはしから此通りチカラ飛仲官先達アマタクニて幽里ヨウリ
城じゆうへ押込置たる西伯セイハクめ引すり出して拷問ガウモンせよ、是よりハ奥殿オドウみて天盃テンボウ
を廻らさん皆みな來れと入給ハシメへばはつと名メイる警驛ケイヒの袖アシメかき合す禁闕キンケツよ
樂の響きや殺伐の聲ひきみたゞへてかまびすら音おとよ聞沈香亭チムカントウと名メイよ高き
花麗ハナレをつくす化粧殿カハジドン裏ハシモ嘆タモしき花園ハナエノよ今ぞ牡丹ハナダの花盛ハサカりむれ飛蝶ヒテも
猶更ハサシいとく詠カタめも増アゲぬらん早ハヤたそがれて木の間アシマる臘月影窺カガひ足アシ

案山子又有ぬ一曲者、あやしと跡付來る下官曲者までと後抱身をか
い沈んで盡かづき、又組付をふりほどきぐつと一亥め、絶入死骸、かしこ
へ蹴飛し花園の、繁みみこそひ隠れぬる夫故、胸の千筋の乱れ亭や解ぬ
思ひの錦糸蓮、我子の錦舍いざあひて玄ほれ、出たる庭の面遙こなたみ
ぞみて、お后様へ直よみお願ひの筋有て、はるべくと參りし者たそお取
次といふ聲の、もれ聞へてや一間も出る姐己の楊柳の風よあやめる其
姿見るとはつと手をつかへ、わらひに西伯文王が妻綿糸蓮とす者、計ら
ずも夫西伯仇人のさかしら言みて、羑里城より擒られと成、國に残りて我
々が憂を重る此年月、露塵覺へあき事をば推もじ遊べして、どふぞふ
歎し下さりませ、錦舍、ちやつとお願ひゆゑやいのと、云教ゆればいた
いけよ、やお姫様、とも様をお歸しよされて下さりませ、と廻らぬ舌もお
のづから、虫が玄らする血筋の縁、お慈悲くと親と子が睡みちらす涙

の花拂ふ方あき其風情、姐已も玄ほるゝ聲を上いづれ高きも賤しきも夫を思ふゝ女の情、文王猥りよ古易こゑを起し、七年の春秋を經るあらば殷の帝亡はろびんと、妄言まうげんをもつて人を欺あざむき、謀叛むはんの企有くはなてとの風聞ふうもん驟うそか誠まことひ玄らね共、そもそも之の切なる心を察し、帝様へい能やうのううう自がア上、文王が命ハ助け歸さん、アアくれ后、大王の仰よよつて、只今糺明きゅうめい仕ると、聲諸共よしゆうえ飛仲官引立出る西伯の見る目いぶせき首かせの苦痛くつう又絶し有様うりょう、ちいとしやと欠寄妻ききのけはね突退ついて刎かわ退狩人たんごじんの羅網らもう又苦しむ文王の、ゑり髪取かみとりてぐつとねじ付つけ、濟先年此洛陽の守護しゆごたりし時、罪人武吉つみひとが命を助け、呂尚りょじょうととへる漁父ぎふを始め、王城の百姓原我領國へ引入て、殷の帝を傾けんとする大罪人ざいざいじん、すあをでい白狀はくじょうせまい、骨ほねをひしいで云せてくれんと、勢せいひか、れペペママて飛仲ひちゆう、文王が謀叛むはんの企是くわだて予よといふ證據しゃうご有あかア其義じぎ、大王の仰あおい重じゆうく自じが詞こと用もちぬかア夫ハサアくくと問詰たずられ、一句いふえきつちり飛仲

官、顔ふくらして扣へ居る姐己アシキの下部シテと文王の、首かせ手かせ取捨させ、夫婦ウフと向ひ氣色カシガタを正アリし、妾深閨シンドイケに生立て、軍學歌道カムラハタチの辨へねど、百卒ヒツクの得安くして、一將ヒサシの求めがたしと常ノル父のアバお物語モノガタリ、あつたら武士ブシをやみくと、責殺ザムルさんも本意ならぬべ、文王親子の一命ヒツメイの妾サトウが身カラよかへ命送ミツメス、夫婦ウフも嘸ハゼやと情有シヨウヨウ、詞嬉しく錦糸蓮ハナシキ、あつかしの我夫オガフと縋ツガり歎けハラハラば稚子チコもとし様抱ハグマサニて下アシされど、左たふ妻子チフよ不便ハラカさの浮ハラカ々涙ハラカハラカを押ハタハタかくし、我在國の折からよ、讒者サンショウの爲ハシメよどらハラれて、危難ハラカよ逢ハラカべきうらかたを思ハズ得たるハラカ天の告ハラカハラカ、日月ハラカハラカよ浮雲ハラカハラカあり、人ハラカよ不時ハラカハラの災ハラカハラカひ有ハラカハラど、無實ハラカハラカの罪ハラカハラカよ落入ハラカハラカしを、不思議ハラカハラカみ助かる後のふ情ハラカハラカ、有難ハラカハラカい忝ハラカハラカい、そうでござんす共、お前の爲ハシメよ命ハラカハラカの親ハラカハラカ、錦舍ハラカハラカアレああたへお禮ハラカハラカを申しやいのと母ハラカハラカが押ハタハタゆる御階ハラカハラカの元ハラカハラカ何ハラカハラカのぐいんせハラカハラカも七ハラカハラカつ子ハラカハラカが、盡ハラカハラカす禮義ハラカハラカも愛ハラカハラカぎかり、顔ハラカハラカに見ハラカハラカとれてハラカハラカ、ほらしよい子ハラカハラカで、有ハラカハラカいの、自ハラカハラカもせふハラカハラカしてや、の一人ハラカハラカも設ハラカハラカけんハラカハラカと

朝夕祈いのれど甲斐かひもあく、あやかる爲ます爰ゑへおじや、是はとく有難うなづい今
のお詞ご錦舍きんしゃ、ああたのお傍そばへ早はやふ行ゆきや、テモ仕合せな子こで有あと、子こよ餘
念おもあき母おや親しんがいざあひ登のる化粧殿けわうでん、近ちかふくと招まねき寄よ、ドレ菓子くだしを取とせ
んと隠かくせし短たん鉤けい、拔取影かげ、稚子わらわい、か嚙か様ようこへいと逃と出す、筋攢つかんで引戻ひもどせ
バヨリヤ何事なにとさしゆる母おや、脾腹ひはらを丁てきと霞かすみの當様とうようより下もとへ眞逆まぎやく様よう、得いたりと
飛仲とびなかとびかしり、絶入妻だくじゆを三寸繩さんすうのう、かたへの柱はしらよ猿繫さるつな、驚おどろく文王息ぶんじやくを詰
様子ようざいいかゞと猶豫なめらふ中なか、辨べへしらぬふさな子こ、こへい、へと泣叫なきまわぶを
耳みみよもかけず忿然ふんぜんと始はじみかへる、姐あね己おのが面おもて、怒いのりを含くむ聲こゑはげ敷はげしき、最前さいまへ
窺くわひ見るに、文王表ひらみ仁義じんぎを鑄つくるり、内うちよハ野心のぞみ疑ひなし、ヨリヤ飛仲とびなか、彼かれが虛きよ
實じつを探さるべ、此こ駘たたが腹はらを裂さき肉にくをあたへて、西伯せいはくが善惡邪正じやよを心見こころみよ
はつと答こたへて玉床よみゆよあらけ泣なき入い、錦舍きんしゃが手足てあしくるくくるくと手てはしかく
始終し終まつを見聞みきみ文王ぶんじやくの爰ゑ一世いせの浮沈ふちん、ト歯はをくくいしばる其内うちよ、下官げかんよ

通じ用意の道具はこぶ、庭先アカシあたよアタヨ、息吹返アヒキガタク、錦糸連キンシカン二目とも見も分す狂氣の如く身をもだへアハハ、あんまりじやくわいのふ、情らしう見せかけて、顔よ似合アハハぬ鬼后カニナカ、科カタもあい子をむごたらしい殺さみやあらぬ譯あらば、母も一所イシツ殺してと、かけ寄んアハハよもしぱり繩、鉤逆手スカケテよ稚子の胸押分アハハて飛仲官ハタハタ、ぐつと突込アハハ血煙チケドリ、切るアハハ子より見る親アハハ、此世からなる呵責アハハのせめ刀活紅蓮ハルハル鉤の山鉤樹ケンジロウの地獄チドリ目のあたり、身も世も有れず母親アハハ、かしるうめ目も前生の報アハハひか罪アハハか悲しやと大地へどうと伏まろび心の限り泣つくす哀アハハを餘添アハハよ飛仲官ハタハタ、腹十文字アハハみきりあはき、掘アハハみ出したるぞうふのしむアハハ、傍ある器アハハよ寫し入アハハ文王アハハが前アハハ誥寄アハハてアハハ、西伯紂王アハハの勅諱アハハじや謀叛アハハであくべ是哈アハハヘアハハ哈アハハヘアハハとさし付アハハればちつ共愁アハハふる色目アハハもあく普天アハハの下卒土アハハの濱アハハ、王土アハハよ有ざる所アハハもなし我賤アハハしくも西伯の守アハハりとして、歟アハハ代恩顧アハハを蒙アハハる身アハハよ何しよ異心アハハ有べきや、に疑アハハひ

をはらし物、たゞへ我子の肉たり共紂王も玉ハレバ、取も直さず山海の
美味珍肴辭退致さん様もなし、ア有がたしと押戴き食し玉へバ思案の
腮、くい違ふたる主従が、互々目と目見合せて鞠れ果て見へけるが、飽迄
邪智の飛仙官よしく、此上へ手をかへてだいほんの落し穴、それよく
と一人言獄屋をさして入跡、始終の様子奥の間、窺ひ玉ふ般の紂王、
大口明て高笑ひ、傳へ聞、天竺流沙の川上、靡といへる獸住んで水
を好んで水面に立寄共、おのが姿の移るよ恐れ、終々渴して我子を喰ひ
其膿血、又咽を潤すまつ其如く愚朦の西伯、いかよ命を惜めバ逆、骨肉の
慳を殺され肉を喰ふ大だりけ、何事か仕出さん、ぶち殺すも剣の穢
れ、立去やつとねめ付給へば、姐己いあんて頭をふり、妾聞靈山の鷗、諸
鳥をねらふて、爪を匿す、油斷あらざる彼が心中、助けかへば竹林、虎
を放つよ罝あらず、只此儘よどらへ置、助命の事へ追ての沙汰、何さく、

譬此場ひへかへすとも、きやつら二人ふたりの籠中くごうちの鳥、四百余州よほりゆしゆうを放し飼かま。官人共、西伯夫婦せいはくふうふを退出せ早はやくく、と烈はげしき繪言ひげん、夜の御殿おどりへゆうくと姐己いざを、いざあひ入給ふ其間とき待兼まかねかけ出る雷震らいしん蓑笠みの脱捨錦糸かさぬきがいましめ、とく間過おちしと死骸しがいの傍わかへいやと抱き付、わつと斗りよ泣立づむ、雷震文王らいしんぶんわの前まへよ頭かしらをさげ、君きみとられ給ひてより、日夜心こころを碎く我わ、紂王じゆおうを亡なほさんと大公望だいこうぼうが差圖さしづよ隨したがひ、忍んで諸軍しょぐんを都みやこへ引入とく是ぜよ忍び居て、始終はじまつの様子ようしよの承うけつた、天地あまぢやよもかへがたき大切だいちやくある若君わかわを、殺害せつがいさせし姐己いざが奸計かんけい、一ひしがとひとしがと存あせしかば、君きみの心こころをばかり兼まかねさし扣ひきへしうの無念むねん、推量すりやうし給たまへと、遺名いみょうを得し荒者あらものも哀あれ催すす有様ありさまよやも黙だましたる文王ぶんわの子故おとこの闇くろよかきくれて、洟ののきる涙なみだを押はらひ、紂王じゆおうの無道むどうよよつて四百余州よほりゆしゆうの民百姓みんしやくし、貌妻子あらわしよも引別れ塗炭だらんよ落入其悲みぞしみ、天あまよかへつて救すくへん爲ため惜からぬ命みことをかべひ悴すくが肉にくをきつせし時とき

い、恩愛不便の矢先みて、五臓六腑を貫く心地、其苦しみも四海の爲、よ
く死だ出かしたと口よい立派目よもるし、涙隠せば錦糸運あへあきか
らを抱き玄め、こんあはかない、うき目を見るとい露立ちす、と、様よ逢
たいどこがれ暮し泣明す、此子が心のいぢらしさ、人目忍んで縁子を杖
よ、柱と尋ね来て廻り逢たる甲斐もある、罪あき者を胴欲な、非道の刃に
かけるとい何の因果と身をもだへかこち歎けば文王も、こたへ、くし溜
涙心を察し雷震も、浸す袂の雨やさめ涙の落て烏江よ春雨玄きる沖津
涙爰もうつすがごとなり、雷震はつと心付、返らぬ歎きよ時移りいか
ある夏目も斗りがたし、拙者の猶も忍び居て、大公望が寄來る時刻、手筈
を合して狼煙をあげん、必ずぬかり給ふあと、勇める詞よ打うあづき、我も
是より城外みて呂尚よ談じて軍の用意無益のくり言見苦し早とくく
とすゝめられ、涙と俱み亡骸を、野邊の送りと抱き上ねぐらへ歸る友鶴

の籬はいへ冥途めいとの鳥鐘とりのくのの聲のみ跡あとみあくくも引別ひきわかれてぞ出でて行ゆ時ときしも感かんえ誘いざなはれて貝鐘かいがね太鼓だいこ亂調らんとうよ手てみ取とくと聞きへける程ていも有あせす欠うけ來る官人かんじん廣庭こうていよ大息おほききつぎ、援あも西蠻岐國せいばんきこくの兵其勢凡三万余騎よ此洛陽らきょうを追取卷まき無二無三むふむさんよ責立せきたてる思おもひがけなき警固けいごの官軍かんぐんうろたへ騒さわぐ其隙そのまゝ、城門近く貴入きいりて甚ひだ危あやふく見みへひ早く御加勢かせ下さるべしと云捨すててこそ引ひかへも玉座玉ぎょくざぎょくだれ蹴放けはなしく、ゆるぎ出だたる殷おんの紂王のうおう我われ王城おうじゆとも撻うづから毛乘込けのこんどする不敵者ふてきしゃ、レぼつちらせと下知したしの下げはつと答こたへて飛仲官手勢引ひつれかけり行ゆ間まもあく込入寄手こらへゆの元師げんし、大公望だいこうぼうが其出立なんばんてつ南蠻鉄なんばんてつの大鎧頭よろひに輪巾羽扇りんきんようせんをたづさへ、諸軍しょぐんを勵はげさす勇いさみの大音、アアく紂王のうおう慥さんみ聞き汝な姐あい己じが愛あいよあはれ、下しも萬民まんみんを苦しめ惡逆おきごくあげてかぞへがたし、其罪そのざいを糺あわさん爲ため西伯公せいはくこうの命めいよつて、大公望だいこうぼうが向むかふたり覺悟かくごくと誥かくかくれバ紂王のうおう怒いかりの髪逆立かみきりだり、奇き怪くはいなるうづ虫はんじゆうめも、万乘ばんじゆうの位いをふむ朕わたくしよ向むかつ

て慮外の雜言、目と物見せんと帶たる寶鉢、枕間も有せず紂王の胸板打
ぬく二ッ玉得たりと左げみをかけ出る雷震、首かき切て大音上、大惡不道
の殷の紂王岐國雷震討取たりとさもいさましく呼りれば、大公望諸軍
よ向ひ、紂王亡ぶる上からハ妖怪姐己を討取と、下知より早く血氣の雷
震金殿紫閣をかけ廻り、さしゆる官人片つぱし切立く「追て行

樓門の段

や、更渡る夜半の空、星の光もかうく、といと物、漢城外より、人馬の物
晉鯨波、さもすさましく、聞へける洛陽の高殿、すつゝと立たる殷の姐
己、簇つく失石を事共せず袖をはらへべ飛くる失さき筈を返して落ち
る有さま、さしもの西伯諸軍勢、責あぐんでぞ見へよける、かしる所へ大
公望跡よ隨ひ出来る雷震、姐己を見るより眼を光らし、紂王よ惡事をす
すめ數万人を害せし魔王、目と物見せんと飛かしる、袖を扣へて大公

望一かたあらぬ多年の妖怪其本身を顯へすより終南山の雲中子が我
よあたへし障魔の名鏡イテ心見んと錦の袋紐とくくと取出し姐己が
面よさし向へば鏡の光りよ恐れけんそゝろ身震ひ忽ちよ芙蓉のまあ
ぢり薄紅桶尺ある黒髪ふり乱しづも苦しげなる聲音みて我ハ天竺天
羅國よ生を受數千年の齡を保つ白面の狐あり花陽夫人と身を化して
班足王を惱ませしよ普明長者よ妨げられ本意を達せず此土へ渡り蘇
國の姐己が姿をかり此唐國の人民を亡ぼさんと思ひしよ鏡の威徳よ
身をせばめられ此儘よやみあん事抜口惜や無念やと眼を怒らし歯を
くいしばり手足をもだへ苦しみしがあつと一聲櫓よりまつ逆様よ落
るを見へしが透さず雷震斧ふり上首をはつしと打落せば忽ち四面なぞま
常闇の吹来る魔風砂を飛しふしぎや姐己が戸より一條の陰氣虚空よ
登ると等しく金毛九尾の姿をあらわし東方さして飛去し其古へを假

名書よ爰ようつしてひさしけれ

第三 日本 清水寺の段

禹湯己を罪て興桀す、紂人を罪して身を亡す、殷の妲己が顏艶も周の勇將雷震が打碎いたる斧の柄の長き例を今爰よ傳へくて七十四代、鳥羽の院の玄ろし召御聖徳ぞ、いみじけれ、いで其頃ハ永治四年卯の花月當今御兄薄雲の王子、清水參籠有べし迎地主のお庭と大幕打せ設けの玄とねよ着給へば、ほかたいらよハ犬淵源藏友景其外近侍從者の面列を正して扣へ居る皇子緩と席を見下し、我當今の兄といへ共日蝕の生れ故、弟宮よ帝位を越られし鬱憤やむ事あく、何卒して万乘の位を奪へんと隱謀を企て、攝家溝花の分ちあく大半ハ味方よ屬し、只氣ぶさいあり右大臣道春め討取んと思ひし内くたばつたのもつけの幸、誰憚る者もあく大望成就ハまたく中、あら心よや悦べしやと、飽迄募

る放逸我慢犬淵はつと頭を下、先達て齋塚金藤次より仰付られし通り、なんなく道春が館へ忍び入、うばひ取て、差し上し獅子王の劔傳へ聞天竺天羅國班足太子の后花陽夫人、誠に金毛九尾の狐よて、佛法を滅し魔界よせんと謀りし所、彼名劔の威徳より恐れ唐土へ飛去し例此劔の徳をもつて諸國の武士を味方より招き、君を位より進めん事掌よりど、何があふ氣よ犬淵が取玄めもあり退從皇子重ねてナア源藏、道春が娘桂姫、朕兼よ心をかけ毎度催促致せ共、打捨置條奇怪至極、彼が館へ立越て得心せず之首討て立歸れと金藤次より申付よ、心得たるかと烈火の勢ひ、言捨座を立大鵬の一擧九万里計りあき、心の奢りいつとあく暫しハ曇る薄雲の王子より引添犬淵の方丈として入よける、春更て、風も薰るや振袖より、とめ木が誘ふに所育道春公の秘藏娘桂姫と名付しも、年よりさよふ月の顔幾夜か、一人おもひ寐の心のたけを清水の一木のかげより妙が、敷毛氈の色

もよき、女中同士のあまめかし、爰おんよ陰陽かみちやうの頭阿倍かみあべの恭成むねなりが弟采女おとめの助
恭清すけよし大小おほこちさしも立派りつぱの若者、櫻さくらが元もとよりあゆみ寄よ夫めと見るより懲懃じんぎんよ、是
は是これに姫様ひめさま存在じがけないに參詣さんぐつ、殊こと々天氣快晴くわいせいとて木々の葉櫻はなざくらに遊ゆ
覽らんも一入いつりゅうのに恩おんみと、挨拶あいさつすれば桂姫けいひめ兼そなへて心こころをかけまくもさし向むけふては
今更いまさらよ顔おもてに上氣じょうきの櫨はなもみぢみぢ穂ほよあらるはし物ものごしと、必共ひきょうのもせかしく
申采女様おとめさま、姫様ひめさまがあの様ようよ言い兼そなへあるも無理むりじやないに前様まへようよ首
だけで、是程送おもてつた狀じょうみよつるよ一度の返かへしもない故ゆゑ、何なんでもけふけふの色
よい返事かへじいやでも應おうでもかぶせよやならぬましげみ殿だい、それくく斯
出合あつあたが百年ひゃくねんめ、取付引付とりつけひきつけふつしやれと、突つやられてもも志しく、とだく
つく胸むねを押おえづめ皆みなの者がいふ通り妹いもや母様おとめさまの目顔めがほを忍しのび、千束せんばくのみ
返かへり言いふへ長ながの夜よ、泣な明あしたる磯いそ千鳥せんじや、是程思おもふみ胴欲どうよくあつれないわ
いのと寄添よそて、恨淚さみだれ五月雨さつきだれ、露あく野邊のへの、かほよ花風はなかぜよもまるよ風

情あり、采女の助ももて餘し、是へ又迷惑千万、又玄ても拙者をおあぶり有あとふり切袂、袖をひかへて、そりや余りぢや胴欲な、殿御も惚たといふ事を姫させの身で恥かしい、嚙か誠に此通りと、采女の助が差添を抜取給へば、一興御短氣ああぶあやと、妙はしたとりよ。まあだめいさむる折こそ有思ひがけあき犬淵源藏、下部引連かどり出、主人王子の云付故此所も待請た、姫を渡せば其通り、左なくば儕々此刀、其首筋へひやひやく、サつめたい目をせふよりへすあほえ置て立歸れとかみ付やうよ罵つたり、采女の助つゝと出、ヤ志ほらしうんざいめら、主よ劣らぬやま犬淵皮引ぱいでほへづらか、さん、シお姫様を裏道から早ふ早ふと呑込で、そんならお先へお供せう、跡から隨分お早ふと、皆よ付添姫君へ、館をさして歸らるゝ、そふりおせぬと犬淵が、欠出すゑりがみ引摺み何の苦もあく、頭轉例、遁さぬと家來共受てかしるを刎倒し、向ふ

て来るを引寄て、大地へとつさり後から、むちやぶり付をふりほとき、前へくるりと、米俵よねたわら、二段返しや三段四段、五段ねの例の段平物、はげ敷手並ななみ、
尾をふつて、遡出す犬淵下部共、ヨリヤ叶ハタのねとかけ出すをあとを、志たふて
「あ」よてゆく

道春館の段

思ひ寐ねの、夢の間枕ゆめのまんじゆ又契る、明がたや、琴の志らべことば、初花姫、惣共ようたゞ
せて、ひく爪音つまづきおとの氣高さよ、右大臣道春公の夏座敷、松吹風も一亥いほよい
と、涼しさ増るらん折ふし一間騒さんざいがしく走り出たる桂姫、のふ采女之
助すけ、何國なんくにへぞ、是のふくと取付て、アアそあたアタ妹の初花ハタ耻はずかしやと
袖覆おはひ胸むねあでふろす計あり、初花姫はつはなひめ不審顔しんしん、ナナ姉上あがめけたゝましい今いま
お聲こゑ、こひい夢ゆめでもほらふじたか、お氣きもじわるふふないかへど、介抱はせうぱう
れば面おもてはゆげふ、そあたの手前まへも面目おもてあい、さつき母様おやぢやうが旅行りゆうこうの戀こいと

いふ題だいを給へりしゆへすよまんと思ひしよ、何やかや心もつれ案じわづらふおしまづきもたれかゝりしうたむ寐み采女之助うめのめと只ふたり宇治の川邊をそこ爰いとと賤しづかの手業てわざも打ながめ、苦くるを數さす寐みのかぢ枕しらね、嬉しい夢を見たれいのど、咄とつし給へべ必共のづかとふでりんあ事かして此ふ汗あせの出た事れいのど、つとの乱れ又櫛くし入て、いたりりやせば初花姫はつはなひめ、此頃このごろいくよくと、とふやらふ顔おほの色いろもわるい、其様ようよきななーと思し召ふ志しつらひでも出でやうかと案じらるしと姉思ねいしひ、手てを取かれず姉妹ねいめいの、中なかぞ床ゆしき大内育おおうちいくかる折から入来る安倍あべの安清やすき、几帳こてうのこあたあたみたみたすみて、後室様ごじやうよりお召めしよつて只今參上致さんじゆうししたりたうお取次とりつきと云入る、聲こゑよ飛立かつら姫ひめ、必のづかはした立たつさりぎさりぎ、そぞやこそ今いまのが出でたと、さゝめきあへばば、姉様ねいじやう、自じ采女之助うめのめの見みへた事ことお忘うつらせせす、さん皆みなこちへと、心こころきかして立て行ゆ、まだうち若き初花はつはなの、やがて其身そのみも戀うらぎかゝ、ほのめきざか

りの必共引つれ奥へ入跡よ、入間侍兼かつら姫、逢たかつたと走り寄、縋
り給へばふり放し、^音聲が高いお姫様、委細に存じ有通り、皇子の方よ
り毎度の催促、^音入内有バ双方無事よ治る浪風、もし得心あき時ハ後
室様の身の上、爰をよみ辨へて、拙者が事ハ思ひあきらめ下されよと
いふ顔つれト打守り、^音そぞやあんまりにや曲があり、今更いふも耻
かしあがら、北野詣での折からよ思ひ初たが身の因果、ほんよ寐た間の
夢よさへこがれ、憧るゝ戀しさに、逆も叶ひざ思ひ切忘リよと思や、思ふ
程猶忘られぬ、女子の因果、夫よ引かへ胴欲あむごいわいのと一筋よ、思
ひ詰たる娘氣の譯もなまめくうらみ泣、折ふし次の二間よ、花もうし
嵐もつらし諸共よ散げどさそふさそへばぞちると、古歌を吟する母の
聲、^{ハシタ}思ひし姫よりも采女之助の氣をあせり扱い様子を存か見付ら
れて、互の難儀、まづく奥へと押やられ是非あくくも入給ふ、時し

も襖押明て、館の後室萩の方、玄とやかみ座し給へば、采女之助両手をつき、憚りあがらぬ前様に安泰の躰を拜し、恐悦至極仕る。今日お召の様子に用いかゞと窺へば、奥口見廻し萩の方、近ふくと小聲となり、そあたも兼て玄る通り、先祖を傳へりし獅子王の劍、何者の仕業みや盜み取て行方失れず、此事禁庭へ聞へあべ藤原の家にもつしゆもしもの事が有たなら、草葉の夫へ云譯あくとやせん斯やと自分が、身よつゞまりし今、の難義便りといふにそなた衆兄弟、力と成てよき様よ、思案を頼む恭溝と世よ玄みぐと聞ゆれば、采女之助頭を下、委細承知仕る、我よが爲みには主人同前の道春公、いかで疎畧よ存すべき、天をかけり地をくゞつて隠る共、草を分つて尋ね出し手よ入んじ案の内、氣遣ひ遊べなしと力を付る折こそ有、皇子様の上使と玄らせの聲、聞て采女へいふかる面色、臺の眉をしげめ給ひ、皇子様より上使との姫を入れの難

罷なも人、自よきと計らひん、まだ嘗したい事も有、采女之助の奥へと、仰ふ否む色目なく然らば後刻と夕間暮、禮義へ厚き式臺と心を奥と次の間へ立別れてぞ「入相時、早夕陽も傾きて、無常を告る鐘の音もいとぞ」淋しき黃昏や間毎を照らす銀燭の光り、まべゆき白書院程も有せず入来る鶯塚金藤次秀國、素袍の肩肘いかつげ、上座よこそい押直る、斯としらせよ館の後室衣紋正しく出迎ひ、上使様よは苦勞千萬、皇子様よりは謳の趣、仰聞られ下さりませと、辭讓の詞よ一楫し、上意の次第餘の義よ有す、皇子兼よは懇望有し獅子王の鋤、今日中よさし上るか、さあくべ娘桂姫が首討て渡さるしか、二ツよ一つの返答只今仰聞られよテヨ、存玄がけなきに難題、その鋤ハ紛失致し、所よ方よと尋れ共今よおいて行方玄れず、今暫くのよ用捨を、キソリやあらぬ、皇子御心をかけられしかつら姫度々催促有といへ共とやかくといひ延し打捨置る

る事、貴族の威勢、よぶきよ似たりと以ての外御憤り、劍がなくべ桂姫、首
よしてお渡しなされとのつ引させぬ釤鎧胸よひつしと萩の方、途方涙
よくれ給ふ後よ始終桂姫、こあたの間よ初花が忍んで様子立聞とも
立ちず御臺の涙をはらひ、迎も手誥よある上ひ、いづれ遁れぬ娘が命味
練のや事ながら、一通り聞いてたべ、過去給ふ夫道春夫婦の中よ子なきを愁
ひ、清水のほとりなる三神の社へ立願込三七日の參籠其歸るさに產子
の泣聲、肌よ添し、雌龍の鉢形よし有人の胤あらん、神の御告と連歸り
育上し、桂姫、間もあく設し、初花、右と左よ月花と詠め暮せし、姉妹を
是非よ一人のない命殺さよやならぬ品とあり、せめて夫がましまさば、
問談合も有ふ物、何をいふても身一つよかしる憂目も前生の報ひか罪
か悲しやど、身を悔みたる御涙どゞめ、兼て予見へけるが、思案きりめて
顔を上、杖柱とも思ふ姉妹、勝り劣りなけれ共、劍で殺さば三神への恐れ

といひ殊々義理有姉娘爰の道理を汲^くみて、妹の初花をかへり立て給
へらべ、此上もなき御情と言せも果す聲荒らげ^ハ、スリヤ三神の咎めへ
恐れ、神のほ末の王子の仰御用ひへあされぬか、よしろれへ免も有、上意を
受た某よ、身がいりなどしひ思ひも寄す無益^{むや}の問答^{もんだ}聞耳持^はナ只今と
詰寄ていつかなひるまぬ其顔色、叶^ハぬ所と胸をすヘイヤのふほ上使武
士^{ムサシ}の物の哀をしるといふ自が一つの願ひへ此双六盤、二人の命を天
道の差圖^{さと}より任せ負^はたる方の首討^{しゆとう}バせめてハ夫を定業^{じやうぎょう}とあきらめらる
る事も有、とふぞ此義をほ了^{けら}簡^{けん}、慈悲^{じや}じや情^{じや}じや開^{ひら}分^べてと義理^{ぎり}と恩愛^{おんあい}
二筋^{にじん}よつたふ涙^{なみだ}の雨やさめ身^みよふりかしるかつら姫母の情の有難^{がた}さ
ふ慈悲^{じや}といふも口^{くち}ごもる、振^ふの袂^{そで}、衣^きらさめのはれ間^ま更^よ見^みへざり
き^ハ、さまト^トのよまい言^{こと}、見物^{みもの}するもまざろしけれど、バ何とせう是非
がない、きりくとお始めあされ、勝負の付がすぐ^ハ寂滅^だ、成程^ハ、そ

れと明さゞ女氣の歎きゝ心かきくもり、取乱して證もあしたゞ余所あ
がら眼乞、一思ひよといひさして詞あくくとり出す用意の帳四隅み
り立る檻の一本も露を待間やかげらふの、哀れはかあき有様を几帳の
影え采女之助、かしる難義も我故と思へど出るよも出られぬ時宜千々
よ心を苦しめる思ひい、同じ母親が、是が冥途の使かと、思へばいとゞせ
きのぼす胸の子故の五月闇あるめも分ぬくもぞ聲娘と呼出す、ティと
返事も一やうよ、斯との誰も白小袖死出の曠着と姉妹が姿も對の雪柳、
しほれ出たる屠所の道羊のあゆみたゞくと最期の、座よぞ押直る、一
目見るお萩の方扱い様子を聞しかど、先を取れて今更よとからいらへ
も涙ある母の歎えかき疊る心は月の桂姫漸よ顔を上委細の様子へさ
つきよから残らず聞いておりました時はあれし郭公子で子よ有ぬ自を、
此年月の御養育、まだ其上よ妹迄自を助けんとざまゞの心づかひ、思

ひ廻せば廻す程空恐ろしい身の冥加、胸よせまつて一言もふ禮の口へ
は出ぬといなすこんあうき目を見せまも皆自が徒から逆も叶ひぬ想
故と覺悟ひきひめておりました露ちり御恩を送りもせず先立まそる
不孝の罪、お赦しなされて下さりませ、産の父上母様へとこみとふして
ござるやら命の際ときよたゞ一目、あふて死たい顔見たい是斗がと云さし
て聲くもらせば初花姫のふ曲ふきょくもない其のふ詞、たゞへいづれの胤おとあり
共わらぬが爲よれ大事の姉様、お前まへ殺さぬ自を、のふそもじりあが
らへて、使すくない母うへよお宮仕へを頼むぞや、自を、わらぬと死
を争ひし姉妹の心根不便と母親へいづれをそれとわけ兼る胸の涙の
三つ瀬川身も浮計歎きしが、さあらぬ躰からだのふ娘むすめ、上使じょうしへの駆走かくそう、
日頃手練じゆれんの双六すごをひ目よかきや、一世一度はれいの曠藝こうげいなれば、二人共よ大事
よかけをちらも負おほてたもんあやどわつてれ云ぬ親心おやこごころ、かたへの盤ばんを引

寄て、是が此世の別れかと思へば直を手もたゆかゝる例もあや錦袋の紐をとくくとさいの河原を、此世から積石數もふといいの年も重自え持涙互々筒を取かへし、指手引手も端手あらず、切つきられつ修羅道の苦しみ受ん悲しやど思へば筒も手もふるひ怎どろもどろの石づかひ姉をかげへり妹を助けん物と双方が、重一壹六五二四三果しあければ氣をいらちゞくと、崎の明ぬ長證義早く勝負を付められ、早く早くと驚嘆がせがみ立れば姉妹も爰ぞ一生懸命と心づくしの盤の面、母の胸迄つかくる涙呑込くと背ける顔よ露時雨、こい目をふりし姉よりも妹が心の嬉しさくるしさ、姉様がお勝なされたと首さし延て覺悟の駄、見るゝ母親保ち兼わつと計え、伏ゑづむ、刀すらりと金藤次勝負へ見へた觀念と、ひらめく稻妻姉姫の首へ前へよぞ落よける悲しやと初花姫、あへあきからみ取付て悲歎の涙果しなき、泣目をは

らひ萩の方上使の傍そば詰づ寄よてヤア^同狼狽わらわいたか金藤治、勝負かち勝かつた姉娘あねむすめ、あせ切あせきたあせ殺あせごろした。それとさとつて身がいりと初花はつはなが心こころざし、水の泡みずのあわと成なたのも皆其方が無得心むとくじんたばかられたが口惜くちくいと、身を震ふるして腹立涙はらだてるい、上見うけんぬ鷲塚わしづかせ、ら笑わらひ、^同しやらくさい答こたへめ立、勝負かち勝かつふが勝かつまいが仰おのを受うけた桂姫けいひ、首討くびうちたが何誤あやまり、皇子ごんじゆの御心ごんじゆ背そむく旁かた、悪あくく身動きみうどう召めしるよといいつこいつの用捨うよう致あたさぬ、すつ込すりこでお居ゐるやれと權威けんゐを甲つもよ傍若無人ぼうじゆむにんふり袖引裂そでひきはぎ首押包くびあわせみ、よらみちらして立出だきだしろ、は臺だいへくへつとせき上給あがめひヤア過言あやまあり金藤治女きんとうじめと思おもひ侮あはずつての雜言ざげん不禮ふれい、右大臣道春うじんみちるが妻うわこ動うごくなど裾引上長押すそのひあがひの長刀追取ながとひおいて石突いはとてうと庭にわの面おもて、八双三段水車はさんぶうさんじんすいしゃ、母様はぢめさまは何事なにことといため隔はなつる初花姫はつはなひめ、邪魔じゃま仕つかやんあと突退つづのけのけ、すくふ長刀ながとひらりとかりし、ちよこざいあ腕立うでたてと、首くびをかたへよ鷲塚わしづかが秘術ひじゆをつくす上段下段、運うんの極きわめか金藤治肩きんとうじあんさき四五寸切下よこさられ思おもはず跡あとへ

たぢくく、付入刃むね蹴落され是れとかげ寄り臺のよハ腰どうと
打付動かせず采女是よビ飛で出、拔手も見せず驚塚が脇腹ぐつと突込
白刃急所の痛手よどつかと座す。おこしも立ず聲あらゝげ、〔四〕皇子に詣ひ
惡事をそしめ人を損ふ獄卒め思ひ玄れやと刀の鞘ゑぐるかて首玄つ
かとおさへシまで采女早まるな、〔四〕言残す子細有ナ此期又及んで何云譯
血迷ふたか金藤治ミヤ血迷ひもせずおくれもせぬ、先習くと押どめ、苦
しき息をほつとつき、元某ハ東國武士下野の國那須野の何某、故有て所
領よ離れ、當地へ立越さまよふ中女房が初産、うみ落したハ女子の子、浪
浪の身の悲しさ雌龍の鉤形相そへて五條坂のほとりよすてしが、程な
く妻も世を去てうき年月を送りし内、思ハず皇子の見出しよ預り當家
又傳ひる獅子王の劍、盜み取て得られなべ、一簾〔カレ〕の侍よ取立んとの願み、
ア畏つたと忍び入奪ひ取たハ此簾塚〔カレツカ〕に籠きひ尤、欲み目がくれ

悪人の皇子よ玄たがひ積惡無道のほど邪見の心よも忘れがたきい恩
愛の捨じ娘いいかゞと案じ煩ふ折も折最前は臺のほ物語り聞た時
の其嬉しさ肉身のふ子よかへかばひ給へるふ慈悲心有がたしとも嬉
し共何と詞の有べきぞ須彌より高きほ厚恩万が一も報せずしておら
ぬ事との云ながらお家よあだする人であしたゞへ鬼畜の身よもせよ
初花姫のほ首よ何と刃があてられふお手よかゝつて相果るゝせめて
心の云譯ぞど先非をくゆる身の懺悔扱ひと計母娘采女之助立寄て
シテ其御劔の御遍が所持せらるゝテ獅子王の劔内侍所諸共よ王子の
館よ隠し有バ術をもつて取かへされよア斯物語れば劔の盜賊いづれ
も立寄て御成敗なされよとようほひく首取上^ア娘^{ミタテ}爺^{ミタテ}玄やめやい
く、なせ物いふてハくれぬぞとねぶれる如き死顔を打守りく、今端
よ成て二親をこがれ玄たふた心根がいぢらしやら不便あやら其時名

乗の安けれ共、恩義の二字よからまれて涙つとこたゆる辛抱、熱鉄を
のむ心地ぞや、焼野の雉子夜の鶴子をあひれまぬハあきと聞、あたら甚
を胴欲よ首打落し手がら顔むごい親玄やト冥途めいよから恨ん事の可愛かはいや
と、我を忘れし男泣、心を察し萩の方あやも涙ト正脉なく、一樹いつじゅの影の雨
やどり一河のあがれをくむ人も深いゑゑと聞物を蘿の上からそだ
て上、手玄ほよかけた親玄や物かれゆふなふて何とせう、十七年の春秋
が一期の夢で有たかと、返らぬ事をくどき立かこち給へば初花も俱よ
涙トむせかへり、ほんハ夕部ゆべも今朝迄もかふした事が有ふとい神あら
ぬ身の情あい、なんば捨てても子じやないかなせ自を切あんだ、今から誰
とついたりや琴のさらへや十種香じゅうしゅうこうも、手向の種と成たかと聲も惜まぞ
呼び泣、采女うりめいも遠愛着と、義理の玄がらみ恩愛の血筋の別れ驚嚇けいがくが鬼おにを
あざむく兩眼りょうがんよたばしる涙はら／＼、四人が涙一時いつよ落おちて流ながる、

袖の海膝うきと淵ふちあすごとなり、かゝる扼のしも勅使てしと呼べる聲諸共中納
言重之卿衣紋正しく入給へば、思ひがけなく人ひとへ敬うやまひ、請うながし奉る重之
優美ゆうびのひ聲よて、曾頃禁庭そごうにて哥合せの折から、息女初花姫よりさし上
られし讀哥おひかん、みさび江えと底の玉藻たまもへ乱る共、走らるる人ひとと深き心こころを有
しを、帝獻感おひかんなめあらす、ひ賞美しょうびの餘り女官の列�と相くわへ玉藻たまもの前
と改めて召つれ來るべしとの勅諭てしよ、仕丁共、云付たる品早く持もと
いらへて白臺しらだいと更衣かわいの裝束しきぞくうやく敷ひらは前まへとさし出せば、はつと親子
の有難涙、辭するべ恐れと母親おやぢがとりぐ着する五ツ衣、綾羅錦繡緋さむらやうら きんじゅひの
袴芙蓉ふくろのかんばせたをやめの、あたりまばゆき其その紺よそひ、采女之助うりめのすけいつ
立上り、我われは是より姫が首皇子やかたの館やかたへ持參きよじつして、虛實きよじつをもつては釘くぎを奪ひ
かへして奉らん早はやくさらばと立出る、ヨレのふ暫ときしと母親おやぢが首くびと名残なごり
唱名うたないそぐよ黃泉みどりの道みちしるべ、道みちの案内あんないと鷲塚わしのづかが、刀をぬけばがつくり

ともろくも枯る芭蕉葉の路の玉藻もうるほふ袖しほり兼たる朝日の枝雲井の所や九重の大内山へと「わかれゆく

第四 神泉苑の段

平安城の大内裏築地の内み散敷る木々の紅葉の紅ひを、一つ所にかき寄る、帯さらへの跡迄も、是ぞ都の錦なる、符の仕丁が寄たかり、何と平佐此神泉苑といふ所の物すごい小氣味のわるい所ぞやの、そぞや知た事いの、此池より龍神が居るれいや、ア何といやる、龍神が居る、其龍神といふ仁いどんあ仁じやぞいの、甚太平我も嗜め、龍神といふ物へ蛇躰玄やれやい、昔あの池で小野の小町が雨乞み、とひりや日の本あれべ照もせめ、去迎へ又天が下とり、といふ哥を詠ましやつたら三日三夜よが間玄だらでん、奇瑞の有池玄やれいやいとしかつべらしき講釋を、聞て、こなたの鞠れ顔、そんなら小町といふわろが、ことなりやと哥を詠

で雨をふらすとひ、アゑらい幻妻じやあ、こちの瞑めい雨乞でりあい。
借錢乞みいつでもことなりやどやりかけるけれど、雨れふらいで火が
降れどふした物じやあ、夫れどふでも陽氣の高ぶる丙午でがな有ふす
い、恐ろしやの丙午イヤ夫れそふと此間の帝様のほ腦玄やといふて、は
所の内ひそくとかんと鳥、ほ脳といふに上様が舞でも廻つまやる
のかいの、そりやお能玄やれい、ほ脳といふに病氣の事がやれいやい、
此頃玉藻様といふお后がれ入あされて、間もなふ悪いに何病玄やぞい
の、其の病氣の大和錦じや、何じや大和錦、モテ色の病が有の、テ二疊でら
臺の疊たづみのへりじやといふ事じや、こいつれよふやりをつた玄たが玉
藻の精分の藥玄やないかい、何をそりや玉子じや、そふでもほ寝所でと
ち付てふりくさきやつた物であろう、こちらも晩より山の神茶碗蒸の
むしかへし、あたしまらふと夕間暮さゆはる幕さらへを打かたげ、玉敷庭のうこ

爰々木の間くを清め居る折からよつと一陣の深山れろしよそり
れて、吹來る魔風砂を飛し、黒雲空より立覆ひ目ざすもあらぬ闇夜の内より。
顯られ出し老狐の形ち眼に日月電光の、ひかりよわつと仕丁共かしこ
へどうと倒れ伏神通自在の件の妖怪木の葉隠れ逸散よ、神泉苑のみ
ぎわの方底はかとなくかけり行く、九重の南面より溝の水よつゝきた
る、神泉苑の池水よ、浮む玉藻の前後うつそ姿いさながらよ月の面かげ
雪のはだ花の粧ひたをやかよ、此世の人とい見へざりき、嬉しや化粧
負せし我姿是より直よ夜のほ殿へ入込で、帝のほ脳もいつもの時刻、そふ
亥やくと身づくろひ、ほ殿の方へあゆみ行、後の方よ聲有て、玉藻の前
暫しくと呼とゞめ、立出給ふ薄雲の皇子、姫の後を返り見て、誰と思へ
ば皇子様、わらひをとゞめ給ひしり、いかなる仰の有やらん。ヨシ玉藻、い
か成仰とい曲があい、そなたをふつと思ひ初度よみよてくとけ共、否應

の返事もせぬゝ余りつれない爰であふたが是幸ひ是非にくと有ければ、ナ皇子様、自を誰と思し召、當今鳥羽の院の后と定まる玉藻の前、くどき給ふゝ不義邪、其邪合点、うあたの姉の桂姫兼て心をかけし所承引あきゆへ金藤治みナ付首討せたり、又そあたは當今鳥羽の院が招き入て宮女とあす、朕が始て見た所姉み増りし其器量、忽ち懸暴の思ひよ玄づむ丸の兼く、弟宮み位を奪られ、無念骨隨み徹したれば、鳥羽の院を遠嶋させ、王位み昇らん我望み、そあたはへ心み從ひ、直み皇后女御様隨ひ給へと寄添て、くどく姿の鬼あざみ、玉薄の前の顔打守り、今おつまやつたお詞が、私が爲み百千の誓紙み増る御言の葉、必違へ給ふあと、膝よ寄添その姿、露を含みし姫百合の、風みもつるゝ風情あり、うつつたわいもあき王子、六、知た事、弟天皇を退退ぞけ丸の天子そもそも、皇妃、論言の汗のごとし、再びかへらぬ我叛逆、ちつ共違ひあいわいの

と、本心明す皇子の詞、とつくと聞て玉藻の前、袖打はらひ氣色を糺し、其本心を聞上へわらへが望もお聞せ乍さん、元自へ人間あらず、天地開闢の始より億万歳を経し、狐三千世界を魔道みあさんと、天竺にてハ班足王の后花陽夫人と化じ、唐士みてハ殷の紂王の后妲己とあり、又今此日本みて玉藻の前と變じたり、君は謀叛の心有ペ、我神通の魔法をもつてお力と成奉らん、其かわりみに自が一つの願ひも叶へてたべど、頼む詞よ薄雲皇子、驚きあがら重せぬ魂スリヤ、其方へ人間あらず、丸が力みならんとハイヤモ頼もし、く、其願ひどいいか成譯包ず語れど有ければ、有がたき御仰、願ひといふ外ならず、事成就せば此日本、神道佛道破却して、魔道を立て玉れるべし、願ひといふは是一つと逐一聞て打うなづき、云々や及ぶ、夫こそ我兼て望む所、天皇をばつ下さべ御裳川の宗廟を打こぼち、佛もたらゝ焼亡し、神社佛閣破却あさん、ちつ共氣遣ひ致すあ

と受がふ調嬉しげよ、只神國を滅せんよハ神の正体八咫の鏡是を穢る
バ魔界とならん、我三國を邊歷して神通自在に得たれ共、只恐るゝハ獅
子王といふ名釣、支那國普明よ妨られ本意を達する事あたへず、今日の
本又傳來して、又もや害をあさんかど、心がトうは是一ツと聞か皇子ハ
何のく、兼て王位を望みし故、とくと奪ひかくし置百虫の血沙をもつ
て鏡を穢さバ世ハ常闇、父獅子王の名釣も我手又有べ心の儘、有難や
忝や其釣こそ神道の徳を失ふ魔道の仇爰よ有てハ行ひがたし、何卒五
畿内の地を遠ざけて、邊土の土地又捨給へ、然らば其義ハ兎も角も何
かの咄しハ奥殿よて、こなたへ來れと先よ立、日本の天魔異國の邪神、神
の臣末ハ紫の庭ふみ志たく緋の袴引つれ臣殿へ伴ひ行、木影よ親ふ美
福門院、あまたの后立出給ひ、いづれも今のをお聞遊ばしたか、イ皇子
様の御謀叛シ、何事も密々く、聞き捨あらぬ一大事と互よさしやき

點頭合跡を志たひて后達、神泉苑の木隠れよ窺ひく「追て行

廊下の段

金瓊の床の前より遙く千歳の松を契り玉室の臺の上より遠き齡を万歳の龜よ期す、君の寵愛限りなき、玉藻の前が琴の音より月卿雲客それぐよ管鼓の樂の澄渡る夜の御遊ぞ面白き。されば宮中三千の女郎達といつしかよ帝の寵愛おとろへて、獨局よ捨られし、あやめかづらき千歳の前對の屋の廊下よつとひ寄のふ千歳様何と思し召玉藻の前が后と成君の御心よ叶ひ、日暮よ増ての御寵愛妬ましい志やあいかいあ、菖蒲様のおつまやる通り、こちらとんと見かへられ、龍顔拜する事さへあらず、志んきで暮す局の内どふぞ仕様の有まいか、それく私ら廻も同じ事、よくてらしい玉藻の前、帝様のお傍を遠ざける、仕様の局で言合ふ、皆くこちへ來給へと恨妬みの上とも、かららぬ胸の板敷を打連か

しこへ入給ふ、思ひよへ、ひさげの水も湯と成と。古き例たれいを今更よしよ、皇后みつよ美福門院みゆきの君の獻慮あいりょも増花ますはな見かへられつゝうつろひて、月の曇くもれる面影おもて、打立たてたつはれつゝ、立出給ひ、夜の後殿ごでんを詠めやり、世よ恨めしきり玉藻たまわの前入内まへいりうちせしより此かたこゝの君の寵愛てらあい淺からず、其いよしへわらへよも比翼連理ひよれんりの詔のぞり、かわいらぬ契ちぎりと思ひしよ、いつしか秋の風立て、獨りさびしき閨わなの内、涙の袖そでを數たへの枕、一つの物思ひ、いつそ此身を捨て、猛火めぬかと成て此恨はらさん物ものと思へ共、君よ心が引されて、輪廻りんぶん迷ふてゐるひいのふと、恨み涙なづみ紅ひの、十二ひとへよ緋ひの袴膝はかまひざみ淵ふちあし泣給ふ、斯このと見るも后達ごだつ、ひそく奥おくを立いで給ひ、門院様夫さまよましますかといふよこあたも顔おほを上あ、葛城千かつらきとせ菖蒲あやめの前、最前まへまへの様子ようしょを、是こゝよて残らず聞ました、只うらめしいり玉藻たまわの前君のお傍そばを退けるあなた様のお心こころひと尋ねよ門院制せいし給ひ、アシ聲こゑが高い最前まへまへみそかに

神泉苑^{みずのいん}にて見聞し様子、正しくあれハ人間あらず、化生の者と極れば災^{わざは}ひをあさんもしけず、左ハ云あがら武士をかたらふ時ハ君へもれ返つてわらハが身の災^{わざは}ひ、いづれも力を合せ給ハシ、今宵爰に忍び居て夜の^よ殿^{との}へ通ふ所皆く一度立出て、玉藻^{たまも}の前を刺殺^{さしころ}さんいかゆくとのたまへバ、菖蒲^{あやし}かづらき千歳も俱^{とも}我^わニ迎^{むか}も同じ事^{こと}すさめられたる口惜^{くち惜}さ、恨みをはらすハ今宵の内、帝の御身國家の爲心弱^{よほ}くて叶ふまじ、女でこうあれ日頃の恨みやハか仕損^{しそん}じ有べきと常^{とき}より艶^{やさ}しき女臍^{じよろ}もねたみの釣^{つり}とぎ立^{たて}し、錦^{とづら}の袋^{ふくろ}とり出し、銘^{めい}く用意なし給^{たま}へバ門院大き^{おほ}く悦^えび給^{たま}ひ、賴^{あつく}もしき各^{ごく}の御心底^{ごこち}必ず悟^{さと}られ給^{たま}ふあとひそく忍^{しの}ぐ長廊^{ながろう}下窺^{くわ}ひ居る^{ゐる}が恐ろしき、清涼殿^{せいりょうでん}より遊^{まわ}の宴樂^{えんらく}半^{はん}と成^な、時こそ有^{ある}、頃^{ほど}も秋^{あき}の始^{はじ}て、月も入^はさの山^{さん}の端^は、雲の氣色^{けしき}もすさましくうち時雨^{しへ}ふる風^{かぜ}よつれ、殿^{との}の燈^{とも}し火一度にきへかへ燈^{とも}しをどすとむる聲ト、玉藻

の前へゆう／＼と粧ふ姿嬢媚よしとあやあき闇のくらきも通ひ馴なまなづたる
長廊下、あやぶむ氣色も有毛して、玄づくは殿へあゆみ行、待まふけた
る后達、火の消たるゝ天のあたへ、只一刀よ刺通さんと、さぐり来る前後
ろ、既すくニ斯よと見へたる所、ふじきや玉藻が全身より放つ光明月こうめいげつみひ
としく内裏だいりの庭でにわよ照渡り、黒戸くろど萩はぎの戸一面よ夜の錦よしきとかしやげりはつ
と驚く后達恐れわなしき猶豫なまなづしひ怪あやしかりける「次第なり」

十作住家の段

下野や、那須野の原よ、つゞきたる立野の郷かたよ住馴すくなづし十作といふ親仁有元おんじんよし有武士あれと主人の暇給ひきりて、今の世過のせいかりますら男の心を
すぐよ野山狩鹿のさかの巻筆する墨の獵師りやうしとこそそへえられけれ、娘むすめおやあり
此頃このへより怪あやしき姿おもてかげよそひ物の怪あやといふ病びやうよて、心づかひややるせ
なき近所の友連鑿曉はつかが、門口から音づれて、十作殿内だいよか、娘の病氣びやう

をふでござる、やつぱり一人居ますかのと、わめけば納戸を立てる、主十
作ほれくと、是れ深切しんせきよ忝い、聞つ迄やる通り、娘が體からだがニツ二ツ成て、物
の云やうも風俗ふうぞくもどちらがそふじや、らどんとわからぬ、こまつた物
でないかいのと聞いて皆みな横手を打うちうりやかひつた事じやのふ、そん
な病が有る物かと、いへばさし出る五郎作後家さち有あげあく、陰かげの病びひと
いふ物で、かんばこの二股ふたまたでくすべるとえれるげな、夫おとこを見て見みやしや
れと、聞いて傳三つたさんが、くく、夫おとこにてつきり狐きつねか狸たぬき青松葉せいざなか線香屑せんこうでくすべ
たら、忘れるむかるいのの、何なんをいやるやら、そんあ事ことでいく事ことあら、こつちよ
如ごと在ざらいあいわいのの、いか様よう、一人の娘むすめが二人ふたり成たら、内の勝手のよか
らふが、さし當あつて世帶せいたいの物入ものいり、假令米かぎりが安やすけりやこそ、其そのかひりかひりよ仙
臺さん錢せんの遣おれんわいのの、そろくそろくと逝ゆませふかかくござれと打うちつれて、
深切しんせきづくの見舞まひ人も小氣味こきみあるげよこそくそくと、まつげぬらして、立歸

る、跡よ十作只ひどり、あたり詠むる折鳥帽子、方ら張の袖いかめしく、爰
らはきしの神道者、酒邊の樽彦仲人役、ともあひ、來たる黒鬚山の斧六と
いふ柾木こり、門口から免あれど、聲も高間がはらひする旦那先とて
つゝと入、十作見るを是へく、樽彦様よふござりましたの、^ト今日ハ六
齋日、籠ばらひよ參つた次手、ふつと思ひ付た爰のお娘、ひとり置ふより
れど幸ひよい聲が有た故、すぐさま同道仕つた、聲殿爰へと呼こめば、
と返事もほくちやうなごてら布子よ麻上下まぶかみ、かづく手拭ひの
内、^{アリ}娘ほの内へせり爰かへふりやはづかしいとよそ目する、十作見るを
あきれあがら^{イタ}テ樽彦様、は深切の段添ふござりますが、縁づくの事ハ
親のまゝよありませぬ、娘よとくといひ聞せ跡から返事いたしませう
と、聞て樽彦かぶりふり、^{イタ}くそれいわるい丁簡とかく善い急げとアセ
バ、すぐ祝言さえやつたがよからふ、斯いへばどうか仲人口のやうあ

れを、取しやつて損のあい聾殿、見らるゝ通り年若で達者たっしゃづくと、持まへ
の鉄炮てつぱうで穴をねらひ、隨分お娘の氣き入いりやうよのふ斧六、左様さうよう、斯して
参る上からば、何から何迄さい精出して、親仁おやじんさまさまも孝行こうぎょうをつくしませ
う、眞實の息子と思し召れて、宜しく頼むのあいはつも、おのが手の物本
を切て、なげ出したるごとくなる。折から又もほう道ほうぢより、遠夜坊主の道
心者なまへ鍋かけの釜藏かまくらともあひて、頼みませうと門から案内あてなとあたがやこ
つちへはいらがやませ、然らばほ免めんササおじやと、つれ立はな這入はなわか男、是も
木綿きぬのわた入にせんだく物の麻あさべかまべかま、ぶらぶらくさげた竹の苞つぼ、手づか
ら堀ほりたじねんじよを、參さんつたしるしとさしいだせば十作じゅうさくへふしん顔おもて
ナ念才様ねんさいよう、つるに見あれぬ若い人ありや、この人でござりまことにされ
ば、今日参つたれ此人の事、つねからねんごろあ爰あわの内うち、お娘むすめよ相應あいきようよ
い花むこ、同道してまいつたから、一時も早ぶしうげんさせてねち付

たいはいわひけふの日がらもよし、用意あはれ下さりませと相のぶ
る、是が志たり念才さま、どめつそな人よ得心もさせすよ、おしつけわ
ざのむこいり、やつれていんで下さりませと、ちり灰つかねば、それ
わるい合点じや、思ひ立日を吉日といへば、早ふ益させたがよいと、春こ
み顔の取持よ、神道者むつと顔おほ、よしくけづり廻し、づくようめ、ばい
せんから開て居れば、仲人じやの、むこ入じやのと、出家の身として不
埒ひだら千万爰の娘の聲こゑがね、此樽彦仲人仕て爰いと居る、そちらの聲こゑきり
きりと、まくり出して仕廻はつ志やれと、開て念才むくりとよやし、さ
そこなはらひたまへめ、おのれが何ぼふ仲人顔おほても、此坊主お先祖そ代
代からの遠夜得意位牌所の絶たゞぬやう、愚僧ぐそうが仲人よ小言ことあい、そちら
のむこ殿おほきりく、いんでもらひふと、詞の尾おつく釜藏かまくらが、坊様ぼうさまがい
の志やる通り、此むこいりを仕くがつて、友だち中なかへつらが立ぬたまそふ

おもふてもらひふかいと、腰すへかしれべ、こなたの聟コトコトおもしろい、そ
つちが顔を立るあら、れれも一番腕うでづくて、此祝言コトコトにて見シテよリいマ、
そふじやく、其腰押ヒダカ此樽彦ヒラヒコ此念才ヒツジも志シり持スルと、袈裟木綿ケサキモクだすきか
あぐりすて、つかみかしらん有ハサミ、十作双方ハチヂクおしおすめコドロくふたり
ともよふ聞シテやれ、どちらを聟コトコト、取ハサミふも、肝心カンジンの娘ムネが二人ツありまし
たわいの、何ナニじや娘ムネがふたりよなつた、そんあら聟コトコト二人ツ、丁ツよいじ
やあいかいのナニ、それが人間ヒトなりやよけれど、どちらぞひとり化物ヒトツモノで
ござるナニいのと、聞シテ二人ツ、そりやかハラハラとあきれる仲人ノミシタ、二
人の聟コトコトともくつせずコトコト、面白ハマいマ、たゞへ化物ヒトツモノもせよ、此斧六カツが
正脉カツあらひし、聟コトコト成スルて見シテるぞよ、此釜藏カツヅクがてめ上アゲさせ、ほんまの娘ムネ
娘ムネと祝言コトコトするナニ、おれも是から奥ハシモトへいて、お娘ムネの容体ヨウテイ見て置スルと、よぢり込
だる押付聟肩カタコトふりちらして入スルけり、二人ツの仲人ノミシタこまり顔ハマリ、何ナニと坊様ボヤク、

たとへのふしの宵の程、もふそろくと遊ふにやないか、それよふさ
さらふ禰殿ねぎござれど、ゆふだすき、輪袈裟わげさそくくとりちがへ、かんごん
しんそん南無阿彌陀、打つれ我家へ立歸る、十作跡をうちあがめアゲメ、こま
つたぬし達若二人の娘むすめみこりた上、又二人のむこゝ何事じや何とせうし
よ事ことがあい、難義なんぎな事とつぶやきて納戸へこそ入いけり冬冬の日あし
も傾かたむきてかすかよひゞく入相いりあい、哀かなをそふる片山家、黃昏時がごぞ物ものさびし
納戸の内うち立出る、娘むすめお築つきが二人の姿しき、よわたり見廻まわしてほんよまあ
さつきにから奥うちで聞きて居ゐれべ、聾ろうみあらふの何なんのかのあたいやらし
とつぶやけば、こなたも同じ不興顔けふがほ人の心こころを知しもせず、祝言じゅげんせふとあつ
かましい、是と云いも大六櫓だいろくやぐら内うちへ戻もどつて下さんせす、しんきあ事こととた
ばこ盈煙管ほんきせき持手もちてゆくゆらする、煙けふも同じ富士淺間ふじあさな此こまあ夫め今比いまひ何なに
所ところどうして居ゐさんする、こがるしわしが心根こころねを思おもひやりもない事ことか、

聞へぬへいの大六様。むごい男と諸共みかこち涙や、月の顔、うつす、鏡が
水や空、そらや水やと詠むれど、わからかねたる斗ふ、こがるゝ思ひ通じ
けんお築が夫大六、三年以前より在所を出、大臣家より仕へしが主人道春
は最早期より、浪人の身の憂旅、日數重ねて東路や、我故郷より立歸り、様子
覗ふ、舅の門口、お築へ見るより、ヤア、こちの人、大六様よふまあ戻つて下さ
んしたと。いふも一時いりくと、悦ぶも又同じ事^間、女房共そなたも無
事で親父様も達者あか^だく、隣分達者^隣、ござんする、それへ目出たいそ
ふしてそちらの女中へ、あざや何所のお人玄やといひつゝ顔を打守り
そなたがお築玄や^テ、女房共玄や^テ、何をきようく云玄やんすな
んぼ久しらあひぬとて女房の顔見忘れてか^テ、今見忘れりせぬが、そんあ
らあちらへ誰玄やいのと、玄ろく見やりて^間、やつぱりこちが女房玄
や^テふ狼狽て居た事と、ああたをねめこあたを見やり^間、どふ玄や、面肺

から髪のかざり、着物帶の色合迄、寸分違ひぬ二人の女房、こゝく、いか
よど鞠あきれ果、暫し詞もなかりける。右と左より二人の女房二羽、聞へませぬ大
六様、お前とわたしが其中の隣在所で思ひ初はじ、あんな男を持たいと、氏神
様へ願かけた、念が届いてふしぎの縁結び合たるいもせ中、よもや忘れ
はさんすまいといへば、こあたも取組つかまつり、物がたいと、様のふ目を忍ん
でさしめ言とふかかふらと案せしを、仲立入て世間晴はれ、悦ぶ間もあふ内を
出風の便も音信おとづれも泣てこがるし心根を、思ひやりもあり事かと、かくて
ばああたも引よせて、久ぶりみて我内へ戻りあがらも女房の顔見忘れ
ると、水くさい、聞へぬいなと一筋よ、男一人と二人の女、妬む形かなうの纏の
文字を、かくやと見へよけり、大六二人を突のけて、最前から見る所形と
言物云といづれからぬ二人の女房、是非一人の變化へんげの業ごとをふがな
と思案あんの内納戸を出る舅十作、聟殿めぐら、よふまあ戻つて下さつた、是れく

親父様、私も奉公の望有て長くと他國の住居、留主の間々何角のお世話(のぞみ)もふ何の世話といふたとて我内の事(シヨガ)こあたも内を出てもふ三年餘り、便音信(おとづれ)あいふ付、われに元も娘め(メ)毎日く、待て斗(ト)それそふと今迄そこえ居や玄やつたをいのふされば此在所を出しより上方へ登り、堂上方へ有付右大臣道春公(ヒサシタノミツル)へ何道春公(ヒサシタノミツル)へ仕へた、道春公(ヒサシタノミツル)そりやまあよい主取をさつまやつたのふそふして又何故(ハシケ)又玄やつた(タマ)其義(ヒコ)うちと子細有て浪人致し久しうぶりみて古郷(ホロミヨシ)へ歸つて見れば女房がア忘だら(モリ)ふした譯と尋れば、さればいの合点(カドテン)のいかぬ一通りア聞て下され、もふ跡の月の事で有たが那須野(ナスノ)が原へ獵(ハセラ)み出て、あち乙ちと狩(ハサウ)あるき見付出した、古狐(フロギツネ)燃(マツル)眞白毛(マツル)金色、尾(テ)九つ(クシ)われた股(ハラ)何でもこいつよい得物と手覺へのどがり矢ねらひすまして射た所(ハラ)をかへして矢(ヤ)飛(ヒバ)る、南無三寶と二の矢をつがふ内、天窓(アタカ)の上を飛(ヒバ)て

へてくさむらへいつさん走り、何でも爰じやと草を分てさがしたら、大きな穴が有、此中よおるよ違ひのあいと、堀穿つて見た所が、犬や兔の骨ばつかり、形のかいくれ見へぬ故、忘やう事あしよ内へ戻つたれば、娘のふ築いわの如くいつの間よやら體が二つする事もいふ事もどんと瓜二つ、ヨリヤ何でも狐めが業じや引とらへと思へ共、どちらが娘やら狐やらをふ考へてもどんと分らぬ、こあたの目よも分らぬかこまつた物ど、始終の様子語るを開いて大六が、今のお咄し聞よ付思ひ當りし事こそ有此頃都の取沙汰よ、三國を傳來せし金毛九尾の狐、東國よ徘徊し、又ハ内裏又入込で障碍をあすと安瀬の泰成が考其狐こそ件の悪獸女房よ仇なすハ奇怪至極二人の内よ一人ハ必定狐に極れべ、討て捨るが万人の助け、そふ亥やと刀するりと抜放せば、ヨリくちの入わたしひお前の女房じや、あれこそ狐打給へ、イイイそふいふから、そなたが狐よ

なたが、そちがといづれあやなく見へければ、さしもの夫もあぐみ果
暫し、思案よくれけるが氣を取直して、それよ、たとへ一人の妻よもせ
よ、國家の爲みいかへられじ、二人とも手よかくる必恨と思ふあと、又
振上る刃の下左右の袖よ取縋り、情あき心やあ、お前も今ハ武士の
身で狐の業わざを見あらひす、術てだてよ盡て科もなき女房を殺そとひ、いかよ氣
づよきお心と恨めば、こなたもかきくどき死る此身ひいとねと跡よ
残てとく様の歎の程が思へれて、いとしいわいあと諸共よ落す涙や恩
愛よ、刀もあまる斗く、十作涙押拭おひきぬきひ、二人共殺そといふ、聟殿も尤玄や、が科
なき娘も又不便な、刃の下を忍ぬ悪獸、めつたよ正脉おほの顯あらわすまい、いかよ
ま舅殿のナさるゝ通り、神通得たる古狐、一通りで、あらひすまい、お、チ質
それよ、某所持したる主君おもねしゆき預りし奇代きだいの名劍此劍の威徳ゐとくよて、若顯あらわるゝ事もあらん、いでや劍の德を見んと、錦の袋取出し、紐ひとくくと抜ぬき

放せば、劍の光り忽々恐れわななく一人の女赦させ給へあらぐるしや
我こそ三國傳來せし、金毛九尾の狐あり、其劍こそ天竺てんしゆくにて獅子王と号
し名劍、又もや爰にて我神通、ぐぢかれたるか口惜やと怒れる眼と身を
ふるひし、立さらんとする所を、大六透おおかつさす及の下、細首はつしと打落せ
バ十作驚き立寄びだまて、其劍が獅子王とやいかよも是こそ主君道春の家
又傳へし獅子王の名劍、ハ、工んだり拵たり右大臣道春が最期より紛
失せし獅子王の劍、汝が所持するいられあし、最前そちが歸りし時、道春
公へ奉公と云し節、何故古郷へ歸りしと尋ねれど返答せむ、扱へ劍の詮
義に來りしと、某が思ふよ違はず、贋物の劍よて、狐と正躰あらひせし、其
女めの合点がてんが行ぬ、あざとい工と嘲笑あざわらわへば、此劍ハ贋物成か、ふんでも
ない事こと、忝たゞい／＼、龜菊殿かめぎくでん、そたの勧女房けんじょうが一命を捨し故劍の
有所知たるぞ、ヤア、今そちが手てよかけし、娘むすめお築おつきで有たるか、いかよも

劍の有所を見出さん爲、是成女ハ津の國の傾城、龜菊とナ者、お梁又面肺似たる故、女房と心を合させ、狐の障碍と見せたるハ、こあたの所存を探らん爲、それ迄もなく問ふ落すして語るよ落ると、今某が所持の劍を質物と見極られしハ、そつちよ誠の名劍を、隠し置れし是證據、ナ舅殿、誠の獅子王尋常よ、お渡し有と詰寄ペヤアいへして置ば様トのたひ言、劍を隠せし覺ハ、ア、覺あいといへ比性のふるまい、先達て安瀬の泰成が考し所、此邊りよ奇雲立事、是全く劍の徳、然るよ此度金毛九尾の野干退治三浦之助上總之助兩人よ、勅命下ると、ナセ共、彼が神通をくじくよハ獅子王の劍あくて叶はず、然るよ兄宮薄雲の王子御謀叛有て八咫の御鏡獅子王の劍奪ひ取て隠し給ふ、是を詮義なす所、は劍都よあらざれば、察する所我舅ハ王子の舊臣、那須の八郎宗重あれバ、預り有よ相違なし、ナ期明白、顯れし上、最早遙れぬ王子の荷膽人、那須の八郎宗重殿、早く劍

を渡されよと星をさいたる一言又、宗重いかりの聲あらしげ、^ホ_{すいりやう}推量の上へ毎むえ及ばず、某こそい當國の領主たりし、那須の八郎宗重なれ共元より王子又一味もあらず、劍を隠し置たるあんと、跡方もなきたゝ言疑心をいだき太切の娘が首を討たるぶ骨、聾といひへさぬ娘の敵と、傍又有合山刀引さげて立かしれど、大六又つこと打笑ひ、聾鼻のよしみだけ劍を渡さべ助んと思ひしよ、刃向ひ立ハ事おかしと、刀又手をかけ双方お、ザアくくくと詰寄所又はつしと羽ひゞき宗重が、左右の脇又立たる矢先痛手又とつかと、尻居又座し、^詞何やつなれば名乗もかけず、比怯の振舞是へ出よと喫られべ、^詞王子が叛逆又合撃せし那須の八郎宗重又三浦之助義明上總之助廣常見參せんと、奥口一度又押開き、以前の若者花在しく初みかへる狩裝束弓矢、携へ立てて、兩將手負又打向ひ、我又兩人勅を請東國又下るといへ共、獅子王の劍あき内ハ魔道をくじく術なく。

矢田の大六と心を合せ、入聟と偽り此家より入込、密々様子を窺ふ所。宗重が本心の聟み討れん志と、見抜し故より宗重殿、不便ながらも手よかけしが、とても遁れね王子の味方、恨と思ひ走尋道より鉄を渡し召れよと仁義を守る若者、實も東の両助と名よ聞へたる勇士也、手負ひ苦しき息をつき、是非もあき世の成行、惡逆不道と知ながら主命より隨ひて謀叛み一昧あせしより死る覺悟の極めしが、一人娘も迷ひ、仇も月日を送りしよいか、かゝし心得がたきにそちらの女中、最前聟殿の詞より津の國の傾城龜菊といられしが、もしや江口の里明石の刀自どいふ、老女も育られぬせなんだか、其明石の刀自どいふわたしがかも様、うんあらやつぱりれが娘、お築が爲よ、兄弟じややい、と恂り龜菊より、大六も又驚きて猶も様子を聞居たる、つい期斗での合点がいくまい、面

脉から音聲迄似たこそ道理、お築と同月日生れた双子、生落すと母の死る世間の手前隠さんと江口の里の刀自が元へ密よ遣へし一生不遇、娘まさへもじらさず、廿余年が其間、無事でゐるかと朝夕に案じて一生れてくらせしよ、此間から傍よ居ながら、現在我子とじらすして、化生の者と心得ていたしい詞もかひさばこう、今端の際よ名乗合、娘か親かと只一度、いふたが直よ此世の別れ、薄き契りも日頃から、鳥獸を殺したる報ひか罪か淺ましやど、親の歎きよ龜菊も、始て聞た私が身の上、眞實のとゝ様の有との兼て聞たれど、お名もお顔もじらぬ故、長の日數をお傍え居て、露斗ある孝行も盡さぬのみか畜生の業とて親をたゞかりて心づうひをさせましたい、誠の狐よ勞りたる不孝の罪の恐ろしや、まだうれよりもお築様一つ所よ育ながら、姉よ妹と名乗もせず、顔の見あがら現なく化生の業の何事ぞ、廿の上迄立ちあんだと、様や、姉さまよ、あふ

と其儘死別ればかない事が有ふかとくどき立く歎き沈めば大六も
舅殿を謀らんと頼來りし龜菊が現在女房の兄弟との存じよらざる今
のお咄し取分不便い女房お築夫婦の契りも暫して長と他國より引き
別れたまく展ると無肺の頼親を欺く偽りも夫の爲と思ひ詰、狐と名
乗手みかしり健氣の最期とげしるゝ男よりさりし忠臣貞女でかしおつた
と譽る権父ハ猶しも身もよもあられず日頃から此親を大切とする孝
行者今端の際より親と子の眼乞はへ得せず、狐と名乗死んだ身へいか
成過去の終束みて未來の程が思へるゝ忠義といへど此親が悪人よ荷
膽人せし天の咎が我子より報ひむさんの最期れいぢらしや、こらへてく
れよヤ娘コレとし様、聟殿、舅殿、不便あ事を忘ましたと三人が首に手をか
けて歎くを見るゝ兩將も思ひやつたる俱涙、名よりあふ那須の玄の原より
あられ、たばしる如くあり、やう有て両將は涙をはらひ手負ひ向ひ、さほ

と後悔する上り、お築が存念思ひやり、は鉤渡し潔くに最期有とす。
むれア思ひも寄す、一旦主君又頼まれて預る鉤の有バとて、いかで敵
よ渡すべき去ながら死だ娘の追善と、夫成娘へ今生の置土産又、譲り與
ふる物有と、よろぼいく神柳の内又納し刀の袋うやくしく取出し
是こそ手馴し山刀、熊猪を仕留し名作獅子王の鉤といふ共おさく是
よ勝るべき、長き未來の筐など、それといひで手よ渡す、心の謎をとく
とくと寶鉤取て押いたゞき兩将又奉れば、添しく、は鉤は手よ入
からハ那須野の野干退治より聞捨難き王子が叛逆露顯の上り都又登
り、禁庭へ奏問とげ、一味のやつ原討取んと勇立れば、手負ハ這寄斯は鉤
も手よ渡る上からハ、頼て王子の運命つき、也身の大事とならん時、也
兩將の執成みて助命の程を頼入、まゝ氣遣ひせられあ、天理又背く王子が
惡逆ついよ擒と成逆も我ニが乞請て命の助け參らせん、心置れず成佛

有とすもむるも又、義心の功、大六も涙をはらひ、舅殿の情よては釘返進
有上り、最早浮世より用なき某、忠義と探し親と子の最期の別れに善知識
無常を観じて菩提より入んど、髻ふつしと押切て、是より我名も玄翁法師と
改名し、諸國修行より趣かん、又それある龜菊の父の亡骸野邊送り、中陰佛
事を營て頓て都へ登るべし。さらばく、と立出る、適より寄特の發心アマツシテ
打立んと兩將が、すゝんで出る都路や、手負ひ今予だんまつま、親子つれ
立ち終の道、冥途の旅の門出や跡よ、亥ほるゝ龜さくの尾花が袖や露涙ツブリ、
那須野が原の草の葉も元の、東と成みけり

第五 訴訟の段

李延年カカラタタが詩よ、北方より佳人有、絶世として獨立を一度、顧れば人の城を傾
ふたゝび顧れば人の國を傾るとかや、帝此頃御惱と稱し大殿をもりなし給へば、御兄宮薄雲の王子政サツヨウセイを執行江口の遊君龜菊カクイクを、宮中より招き入

色にふぼれて、公事行事^{ごじぎょう}怠り給ふぞ是非^{むすび}なき。女郎達寄こぞりううの葉、王子様へ此間、みあせの御遊^{ゆう}よお出あされ、お傾城の龜菊殿がお目
えどより、御殿へ連てお歸りあされ、夜晝^{よひ}あしの御寵愛^{てうわい}傾城の仕^しこあし
といふ者^は、きやうといもので、あいかいの、さればいの、あの傾城が、ど
れ程お氣^き入たやら夜^よ、御寐所晝^{よひ}御酒宴政事^{じゅゑんせいじ}さへお構あくきつい事
じやとどりの、疇半^{よほさん}へ奥殿^{おくとの}里の姿を其儘^{そのまま}、媚く松の位山、御殿造
りも揚先^{あげ}と、おめる色あき龜菊^{かめぎく}が酒^{さけ}よ乱るし千鳥足^{ちぢゆ}そこに居るの、誰
様^{さま}や、私一人を醉^{よひ}して置て、お手の悪いといふ中^{なか}、奥御殿^{おくとの}薄雲^{はくうん}の王
子亥^{いの}づくよ歩み出^{いだし}くかめ菊、紅葉山の詠^{よみ}も興盡^{こうじん}たれば、又爰^あで酒^{さけ}
せふ、盃持^{しとね}と梅^{うめ}の上傍^{じょうぱう}み引寄^{ひきよ}のふ龜菊^{かめぎく}、此程^{この}の遊覽^{ゆうらん}よそあたをつれて
立歸りしより、三千の宮女廻^{まわ}も目^め付者^{ししゃ}へ一人もあい、まろが心^{こころ}よ叶ふ
上^うの百官百司^{ひゃくかんひゃくし}よ披露^{ひろう}して、女御更衣^{かわい}とあがむへし、何^{なん}と憎^{にく}ふ有まいがと

いと餘念あき詔り、其の詞へ嬉しけれとかり安きハ男の心つらう
り氣な増花よ、悪いせりふをさんしたら、わきや聞んぞとひんとすね、是
ハ又きつい疑ひ斯成上に何の其、四海の撫政も、とかくそもじの心任せ、
く何ぼう其様よりえやんしても合点が行ぬ、其の詞よ違ひあくべ、
お前の體あ心中が、心中合点、我王位の望有て奪ひ置たる八咫の鏡とやら
うもじよ預置からいかれらぬといふ體あ證據、うんあら此は鏡とやら
をあの私よ下さんすか、せいもん嬉しふござんすと、請納る其所へ、
王子様先程陰陽の頭安瀬の安成殿、玉藻の前よふしんの趣、又龜菊さま
よお尋申たい義有ペ決斷あし給へるべしとの願ひ、まだ其外よ此間の
の公事訴訟、今日も築地の中よ相誇居られます、いかゞ致しませふと、尋
よ王子ハ打うなづき、幸よ龜菊よ政事を任す手始よ、訴訟共を捌かせん
心任せよ決断せよと座を立て入給ふ、公卿武官の公事訴訟、領城遊女

の取扱前代未聞の事へける仰を請て駆上よ、鶴菊憚る所なく吸付煙草
長させる公沙汰も媚かしソレもじ野けふの訴訟のおさん方皆呼出しや
アド返事も長廊下禿がなれし呼聲よ、玉しく庭の訴訟人懷紙よあらぬ願
ひ書、階間近くさし出せば禿が取て讀上る、鶴菊様子をとつくと聞願
ひ人ハ了簡内侍のお局相人ハ持兼の宰相様ヨリお局様がれあし貸あま
したのじやあ、れ前もよい年してちつと嗜なませ、人よ貸たおあしを戻
せといふ様あ無理な事が有物かい、ななぜといひあませ、宰相様も無心い
ふお客様でもありや、借りや仕なませんわいあ、それじやよつて出来る
迄待て上なさんすか、それがいやあら帳消あられそれでさつぱりナ次
とはでな捌きよお局ハ、おあしも取ず帳消れぶつゝつぶやき扣へ居
る、次へのつ立り立てる兀の中納言諸足卿相人ハ衛符の仕丁又作白丁
の袖まくしゑぼし横長ようづくまる、お前の願ハ何でおます、早ふいふ

て見ませと、詞よ冠傾けて、まろが昨日の黃昏時、參内の歸るさゝ築垣の
邊りみてあれなる下主、お神酒たべ醉まろが沓みてかれが足踏しとや
ら又みじりしとやら、身よ覺へあきぬれ衣着せ、束帶のゑり亥め上て頬
打たゝきなせしゆへ冠下が、頭痛八百歎慮をもつて糺明し、まろが恨を
はらしてたべ願ひかね斯と有ければ、そんあら行合けんごうよ喧嘩けんかせなましたの
宏やな、子めきのお方よ何ぼふも有事、こちらの白丁様もかんべきらし
い顔付宏や、もふかんよんして上なませハタまかられたら夜が寐よいじ
やないかいと、又氣が濟んと思ひなますあら、酒でも買って中直り、何とお
二人様此捌さばきれどふじやいあと、聞て又作笑壺わくよ入こりよといお捌さばき申
諸足様、此公事ことハ互たがわ五歩ごほく、是から奥の御殿ごてんへいて小牛こ牛うしぐつと引か
けふと、味い事共ともいひちらし、奥庭おくにわさして入こりけり、次の願ひねがひいかゞぞ
と、見やる向むかへとつしりと、一八いちはも過し品形ひんぎょうすつとお末すゑのおはした女めの、

相人さうじんと取た右大辨面目なげおもてぬ居あらべり、ア女中様、お前の願ひも云なませど、どりれて顔おもてと袖そでふほひア、私が願ひを爰いでいふのかへ、耻はずかしといふ形かたちへぞつとする程こいやらゑし、それで、とんと譯わけがしひぬ、アいへしやんせとせつかれてア今さらいふも耻はずかしながら、去年の初春廊下口はなわ、じつとお前が裸身はだかで、腰付こしとらへいちやくと願ひ叶かなへてくれぬかと、心こころやがる者をむりやり紫震殿しんじんでんの階段の元へ、押付おしへし付つけ、耻はずかしと顔おもてかくす、そふして其跡あとふじやいあ、アいりいでも知れた事それからちよこく、廊下らうかの出合しゆあ、其そのどもりがお胎おなかと残り、もう七月でござんする、れろしもア流ながしも成物せいぶつか、それより今さら退のふといむごいつれあい胴欲どうよくと我身をとつぱり右大辨ひざ打伏うつ伏しやくり泣なみだ、こあたも道理と脊せきな撫なでさもり、ほんよやれく、懸程けんてい切成物せいせいぶつあし、ついちよこくと重うるゑよし、情の數うもふことが身み、三つの上う四つ五六、早七月と聞上きこり、さらみ詞ことばも

絶せし有様、只此上へ御前駄、宜夢捌給よろしくまきられかしと冠かぶも落ん斗なり、龜菊
おかしさ押かくし、コリヤ公家様の手が悪い、身持もて成たら玄こゑよ事ことがあい藝げい
子様ごしやうも有あらひ、揚詰あげづめみすゞや物ものが入、金かなで仕切しきつて仕廻まわんせと皆それ
ぞれ又片付はずて粹すいあ捌はしまよ、手てを合あせ嬉うれしさ形かたちもいとひあく、咄とつしの殘りのこり
又後あと廊下ろうかで必顛ひたんうへと尻しり目めづかひのいやらしさ尻しりふりちらして出
て行ゆ

祈の段

程ほどあく跡あとへ入來いりくわる陰陽いんようの頭かぶ安瀬あんせの泰成たいせい、ゑぼし狩衣かうぎかいつくろい階はしの、
元もとは平伏ひよふす、こあたのこあたのに簾まどかゝげさせ、玉藻たまもの前まへたをやかよ、粧よひかざ
り立たつ出て、殿上とのじょうより座おきし給たまへば、龜菊かめぎくの會釋えしゆくして、安瀬あんせの泰成殿たいせいでん、玉藻たまもの前まへ
尋たずたい様子ようしやうとの願ねがひ、何事なんじかかへぞらね共とも決斷けつだんして正ただせよとの王子様ごしやうの仰おこ
テ泰成殿たいせいでん、お前のふしんの趣おもしを、直ただよお尋たずさんせと、差圖さとよ泰成頭たいせいとうを下おろ、

有がたきに仰、ふしんとすり余の義みわらず、此程帝へは腦みて大殿
ごもりなし給ふ、是全く宮中より妖魔の有てなす業あり、早く是を退け給
へど、奏問すれ共玉藻の前、さへぎつて是をこべむ。其心底へいかゞと、
尋み玉藻の笑ゑみをふくみ人の病の器成妖魔の業とい事ふかし、其妖魔と
何をさして、其其妖魔こそ外あらぞさいふ汝玉藻の前、何此玉藻の
前を妖魔とや、自らの化生みづかるわらず、右大臣道春が娘素性正しき帝の宮
女、それでも化生といふべきや、すべて化生といふもの、人間の陰氣
よつれ、皮肉の間へ分入て障碍しやうがをあす汝の正しく三國傳來金毛九尾の
狐其證據しじうこへ過し比清涼殿せりりょうでんにて遊の時、殿のどもしび一度よきへ、物
のあやめもわからじ又門院始官女達、前後よりねらひ寄、其時汝が全身
より光りを放ち、殿中の晝のごとく輝かげしが、是ぞ慥な證據なり、返答
有やと詰よれば、わのまあ仰山あ泰成の詞、身み光を放ちしを化生の者

といひふあら、昔元恭天皇のれ后り、身玉の如く光輝き、衣の上迄通り
し故、衣通姫と名づけ給ふ、又聖武帝のお后り光明輝き給ふ故、光明皇后
とや奉る光りを放つが化生あら、光明皇后衣通姫も化生の者といふべ
きか、左程の事を辨へず陰陽司の心元ない返答仕や、おじもの泰成一句
も亦く口をつぐんで居たりける、龜菊始終とつくと聞、迺粹アリあ玉藻様、今
のせりふで承知仕ました、氣の毒ながら泰成様の負公事ミサケヒジ、ナ立亥や
んせ、お次へいて茶チャでも呑で逝亥やんせと、立んとすれば先よ暫らく、恐れ
あがら今一應、臣が願ひを御聞届けど、といむる詞ハタチ、立留アリスルり、まだせりふが
残つたかへど、もふよしょさんせいで、笑止シヤウシ、お方でい有りいのふ、ハタチ捨置
がたき帝の御腦マツブ、平愈ハラハヤの爲マサニ、泰山符君、御殿マダム、おいて修行致さん、玉藻の
前を幣坂ヘイザカの役ハセ、命マサニじ給ハセらば、有がたからんと願ふマサニぞ、そぞや恐か
ちふハシマいな、玉藻の前の森マサニくも帝様のお后、外の女中マサニまよやんせとひ

へバ泰成タケルく占うらわの秘法ひほうみて相尅さうごくの女めよてハ印いんあし玉藻たまもの前まへ相生さうじゆうな
れば、ひらふお願ねがひひやたいと、詞ことみ是非ぜいなく、や玉藻様たまもさまをふしませふへ、帝
のお爲ためと有あつからり、いなみやも恐れ有あつ、自役じぎょを相勸さうせんん、それへきついお慮
外ほかじや、が頼よりまれた私も立たつ、そんあら用意ようびさえやんせと、勅命てきめい下くだれば、泰成
の悦えびいさみ退出でしゆも、玉藻の前まへ立たつづくと御簾ごれん、深ふかくぞ入い給たまふ、跡あとより、
一人龜菊かめぎくが、何か思おもひの有あつぞ共とも、いざ白砂しらすの、木隠れき隠れ、忍しのび出だたる采女うねめ之
助のすけ、それと見るより聲こゑをひそめ、兄泰成タケルの差圖さとよつて、どくろ是これは窺くわふ
某シテは實じつの首尾しゆびのあんとさればいあ、疑うなづひもあき王子おうじ様さまのほ謀ほめい反門院
様さまのお頬ほほゆへ、色いろみ事寄ことよたばかつて、奪だつひかへえた八咫やつぢの御鏡ごきょう、龍りゆうのあぎ
との玉たまハ得とる共とも、又また得とがたき此神鏡しんきょう片かた時ときも早はやふと取出だし、渡わたせば取とて
押おいたいき、後あと謀叛ぼうはん露顯ろげんの上あれ共とも、當ま今いまの兄宮おうぐうなれば、あら立てたてり事ことの
破はれと種たね々よ心こころをつくせし所取とくかへされしは龜菊殿かめぎくでん、遁はなぶらのはなぶらお鬱うつ君くんよも

さすやく悦び万事の後刻と懷中し立別れんとする所よりつの間よか
れ薄雲の王子よつくきやつ原道さじと切付給へば龜菊の王子の手
よ繩り付、ごくく采女様、爰構へすとほ鏡を早ふく、よ泰清の逸足出し
てかけり行跡よ王子の歯ぎしみ歯切思へば無念と龜菊が、髻、搔でぐつ
とねぢ付、万客よ肌をふれ、恥を恥共思へぬ賣女我寵愛の恩を忘れ、仇で
かへそ人畜生、思ひ知やと龜菊があらわをぐつと様板へぬい付給ふ怒
りの刃先、ゑぐりくるしき息の下のふほ尤でござります、ほ尤でござり
ます、いのふ、元わらひしほ家來の、那須の八郎宗重が娘、生れ落ると父
母よ別れ、江口の里人と成けふよ翌よと過せし内、父宗重が末期の一
句、何卒君を善心よと門院様もほ頼、君をたばかりほ寶を奪取たるふよ
くしみ、お腹いせよ此體、一分だめしか竹鋸いか成苦痛もいとふまじ
ほ心をひるがへし善心よ成てたべ、頼するといふ覺もせぐり苦しき息

づかひ心ぞ思ひやられたり、ア、聞たくもあいよまい言、うぬら如きが千
万人、異見諫けいげんを聞べきや、望み任せ成敗せいぱい、まつ此通りと肩先脊中、情用捨
も荒氣の王子、非道の刃くのはかなくも、此世の息いきへたへよけり、折しも奥
の檀上だんじやう、不淨じやうを拂ほふ、鈴の音、樂めらみたゞへて喧かきく、人や、見んかと龜菊かめぎくが死
骸がいをかしこへ蹴飛す不敵奥殿、深くぞ入いまける、陰陽おんやうの頭安瀬の泰成、願
ひよつて、禁中きんちゆう、檀だんを構かまへ、秘法の燈燭供物とうしょくごものを備そなへへ檀上だんじやう、玉瀬の前、
大幣おほひ取とて立給たまへば、泰成是これ打向うちむかひ、泰山府君さんざんふくんを行ひける庭上だいじやう、皇子
を始始め月卿雲客居げつけいうんきょくあらびて靈驗れいがん、今やと守り居る、檀上だんじやう玉瀬の前いかみ
泰成、汝帝なの御腦ごののう平愈へいゆの祈いのりと僞誠ひもからけ、自みづを化生しかうとなさんとはかる事よく
知たり、行法の力有あば、我正躰じゆたいを顯あらわし見よと欺あざける詞こと、安瀬の泰成たいせい、い
ふよや及ぶ、立所ところ名劍めいけんの威德ゐとくを以おて妖魔の姿を顯あらわさんと、腰こしよ帶せ
し獅子王しゃしゆうの劍けんを拔ぬくば忽たちまちよ、あたり鳴動稻光あいどうとうこうり、檀上だんじやうある玉瀬の前、憤怒はんに

姿を顯あらわして、無念むねんや、推量すりやうの通り我こそれ三國傳來の狐あり、右大臣道春が娘、玉藻の前まへを取殺とぎし、姿おもてをかりて内裏ないりへ入込いりこ、王子の謀反ぼはんより合あつひ此日の本ほんを魔界まかいみなさんと思おもし、神國の威けいより押おされ又また、劍の徳とくよりつて、我魔道まだらをくじかれしか、口惜くち惜やあたどへ都みやこを去よ逃なも、再び那須野の原はらよ趣おもむきて、人民みんを脳ののきさんと、一聲いつせいあつと叫さけぶと見みへしが、金毛丸尾きんもうまるおの狐と變へんじ虚空こくうをよして飛去とほば、泰成持たいせいぢたる大幣おほべを、はたどなぐれば舞上まいじょうり跡あとを忘わたふて、追おて行ゆ、王子見るより飛出とほしゆつ、我叛逆ほんぎやくの片腕かたわざと思おもひし、玉藻の前まへ、内裏ないりを立たさる此上このじょう、一味いつめいの公卿こうけいをかたらひて、花はなを敷軍ひふぐんせん、者共用意わんよういと有あけれど、忽たゞまちひやく金鼓きんこの昔きよ乱調らんとうより打立たてたつく、三浦之助義明上總之助廣常官軍引連庭てい上じょうより大音上おおねじょう、王子の御謀叛露顯おほねぼはんろくけんの上じょう、我わを討手うちしゅより向むかふたり覺悟くわくくと喚わめりられ、小玄こげんやくある燕雀えんざく共とも此上このじょう天皇始はじ公卿こうけいの奴原ぬしはら、一いを引き捨すんと、あれより荒あらたる勢ぜいひよて殿中深ふかく入いる

給へば、兩將つゝひてかけ入んとする所よ、采女之助御鏡携入來り、龜菊が
貞節^{ていせき}みて御寶再び手よ入上り、王子の一命を助け、四國の地へ遠流あせ
よとの勅命、又三浦之助上總之助^{うへ}、片時も早く那須野よ趣^{おもむ}き野干退治
をあすべしと、御劔神鏡さし出せば、兩人はつと頷掌し、有がたき君の
勅謳^{ちょくじゆ}直^{ただ}此儘^{はづそ}發足^{はつきだ}し、不日よ野干^{やかん}を退治せんと、官軍引連勇立那須野が
原へとたつか弓

那須野の原の段

去程よ三浦之助義明^{よしあきら}上總之助廣常^{ひろつね}、獵裝束^{かわらしゆく}の花やかよ、勅命を頭^{かぶ}よいた
だき夥多^{わきた}の官軍引つれて、那須野が原の四面かこませ、草をわかつて狩
立る、されば金毛九尾の狐神通自在の猛獸なれ共、獅子王の威徳よく上
かれて、其身を何と那須野の原、忍び懸る、隈^{くま}もあく顯^あひれ出れば三浦
之助、弓と矢つがひ切て放す、矢先^へ野干^{やかん}のあばらへぬけ、どふと倒るる

其隙又上總之助が手錐みて咽をぐると突通せば、あつと叫びて忽々多年の妖魔も徒々、那須野の露とさへ失たり、両將悅び勇立、野干亡し此上へ片時も早く上落し、帝へ奏問なすべしと、勝鬨^{かつばき}上て凱陣^{がいぢん}し譽^{ほまれ}を世々み残しける、那須野が原またつ石のく、苦^こみ朽^くみし跡迄も、殘れる念^{おも}り恐ろしき。抑此殺生石と云ば、さいつ頃三浦上總の兩助が、勅命^{ちよくめい}によつて退治^{たたかひ}せし、三國傳來の狐爰^ゑと討れし其怨念^{おんねん}石と變^{へん}じて仇をあす、近付、人々もどようも地を走^{はし}る獸も、空飛鳥の、翅迄忽爰^{つばさき}と倒^{たお}れ伏、其骸骨^{がらく}へうづ高く血沙^{ちば}流れて池となり肉^{にく}いつもりて岡と成、地獄のよもじ斯^まやらんされば、玄翁法師迎身を雲水の沙門有、俗性矢田の大六と故有武士よて有けるが、親族の別れより釋門^{しゃもん}に入て諸國修行し、殺生石を教化せんと爰々來つて石に向ひ、さとし玉ふぞ殊勝^{しづせう}ニ、木石心なしとナセ共、草木國土悉皆成佛^{とうかじやうぶつ}と聞時の又佛跡あり、汝元來殺生石、何れの所より來り今生期^かの

如くある。きうく、よされく、と拂子を以て打玉へべ、ふしきや忽石中
よ聲有て、石よ精有、水よ音有、風よ大虛よ渡る、形よ亡び失たれ共魂殘す
我こそ、三國傳來の狐なり、爰よ亡びし一念の人を取事數多あれ共、今あ
ひがたきみ法を請、惡念忽發起せり、只願いもい今より稻荷の神とあ
がめ玉れば、五穀成就守るべし、返すべし、僧の法を願ひ奉ると、く
れく、願む石魂よ、玄翁法師觀喜有善哉、汝が發起、惡念消滅モる上
ハ望よまかせ得さすべし、成佛せよと教化してみちびくのりの誓ひ
やくそくかたき一念の石をくだきし玄翁の智識の徳れいちじるく、末
の世迄もあつまちの、那須野が原よ名をのこす、殺生石の因縁を語りつ
たへて久しけれ

景事化粧殺生石

むかしハ雲の上わらひ、今魂ハあまさがる、ひあみ魂りて、あくねんの、其

妄執のはれやらぬ恨うららかの石いしよりて、亂れみだるいいろく菊きくの生
べし休やすらふ花はなのもと「ヤアきりドす」そあたの足あしの細ほそくて長ながくてなせき
つくりまがつた、これでなけれど、ちよいとはねてとまられぬ、うからく
と石垣町いしがきまちを通つたり、石いしの角かどでけつまづいて、ころくろくころんころんでつ
いたる、杖じょうが飛とびちつて、軒のきよ簾れなたる黒犬くろいぬ白犬しらいぬまだらの犬いぬよあたつて、わん
といふておどした、で、鞠ひづくりした、其拍子ひやうしよ明あけぬ目めなれば、常じつやみどりて色
取坊主とりぼうずでござります、見たいな、夢ゆめよ成共なむら、逢あひたや見たや、夢ゆめよ成共なむらあい
たや見たやさ、夢ゆめよ名ないよもたゞじ、山吹さんぶきや勤つとむよ實じつの有あがら底そこ
うつせし二面ふたおもてほんよ悪性あくじやうの粹すいからむくる、陸りくと思へば女氣おとぎのついたま
されて、うら紫むらさきの色玄いろげんやと浮名うきな立たあがらせ、せい中の小さいさかい死死な
ら死死ねとかな書かきよ、よめるやうよかき書かきもせず、苦 苦を、やますが樂たのしみか、憎ぞ
い男おとことたゞいて、かんで心こころでさすり、泣なみだか笑わらふかしどけなりふり思おもへば、

はづかしや山のはよ入やく、月日のひかりもつよい秋よやうすもみ
ぢ顔みいうあるやさ梅もみぢ、戀のあさけの下もみぢ、立田の川あみよ
サシナシ流るゝもみぢ葉の、谷のしみづみすそや小づまをぬらしたサシミ
立田の川浪よサシナシ流るゝもみぢ葉の谷のしみづみすそや小づまを
ぬらしたサシマ おもしろや、佛も元の思へくのほんのふ則ばたい心ばだい
もすぐよほんのふの、犬の聲く、恐ろしや、さとれべすいと黒佛、くろい
くとおしやんすけれど、やつぱりやばな床いそき、だいてねはんの長
まくら、其むつごとのうすく、七千よくへんのおさやうもん、ちんぶん
かんにこちやいやあ、そふにやへ、かねをたもいて、佛よあらば、かんだ
かぢやまちやみあくろ佛、なむおみどうふ、あむあみだ、あまいだ、くく
あせよお前は不粹なへ、粹もぶすいも、みなおしめて、ねがへやねがへ
やのりのみち、まよひのくもをふきはらふ、つねあき風も如來のしめし

げようべたまのくろぼとけ、かたちひきへて、うせみけり、次のばりまのく
よのかたへらよすむ娘みてし、はりまがた、たかさき高砂や、尾上おののまつり高から
ず下みすむに何やらん、つゆか志ぐれか、懸人けいじんよねれてあふ夜よ下ひも
もといて給たまれ何ぞいあ、はだとはだとを引志めて、其むつごとの中よ
よもふけた男おとこの子だからをだいて一さしまひ子のはま、わどり國さへ
遠江とおとうみ、さる物小づま高からげ、たすきをかたよさつとかけ、遠江あるく、
瀬名せなのはしの下、あるひの鯉こいか鮒くわかはへの子かいかよなんじら、かりう
めくともく志や、とつて、打あげ、かさをや、かさをさしかけて、てんく
てんひでりがさ、さしかけていざさらば、花見はなみ行んせよしの山。又ほひ
櫻さくらの花がさ、ゑんと月日をめぐりくるく、くるまがさそれくく
そふじやへ、これがうき名むすめのはしとある、婿むすめのよいおん女じよめ郎らさまの、そべ
えねたれば、ゆきか志もかみぞれか、むらさめか、あられか、うんらがやう

あ志やつづらでも、いとしきみおまおおひりもうしたら、いがぐりゆの
木うちおろしのあらむしろ、がんぎやそり目、さめはださするよでつく
よふでいとしへ、ゆみや八まんせい文ぶんつ立べり、こしのつがひをうち
やみ志やいでがつくりそつくりそつくりかつくりつら志をかめて。めん
ぼくあい、あそのおともよはつれべいともよひひなどふじや／＼
よつこりわつおりわらへざサ、サ、サののはのやうなせまい氣をもち
やんなのめやうたへやひよろ／＼、サ、サ、サうきようかれて志やん／＼、あ
そんだいなり山さんく、みつのともしびあきらけく、ちらよまおひる神ご
ころのぼれべくだるみや二人、おひおきよし田のまつ志やみて、ちかひ
あらたあ新御靈しんごれい、いわひまつれる朝吉あさよしと、守らせ給ふぞ、日出たけれ。

玉藻前

寛延四辛未年正月十四日

玉藻前曇の袂終

百八

明治廿五年七月十四日印刷
明治廿五年七月十八日出版

發行者兼
内藤加我

日本橋區通四丁目四番地

日本橋區新和泉町一番地

印刷者
瀧川三代太郎

玉藻前

發兌金堂
日本橋區通四丁目四番地
櫻

